林　彪

人民戦争の勝利万歳

中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

外文出版社
北　京

林　彪

人民戦争の勝利万歳

中国人民の抗日戦争勝利
二十周年を記念して

外文出版社
北京

出版者のことば

この論文は、林彪中国共産党中央委員会副主席、国務院副総理兼国防部長が、中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して書いたもので、一九六五年九月三日付『人民日報』に掲載されました。

目次

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線……8
統一戦線の路線と政策を正しく実行する……15
農民に依拠し、農村根拠地を樹立する……24
新しい型の人民の軍隊を建設する……30
人民戦争の戦略・戦術を実行する……36
自力更生の方針を堅持する……42
毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義……47
人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先にうち勝つ……59
フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切者である……66

人民戦争の勝利万歳

中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

林　彪

偉大な抗日戦争が勝利してから、まる二十年になる。

二十年まえ、中国人民は中国共産党と毛沢東同志の指導のもとに、長期にわたる英雄的なたたかいをおこなって、ついに、中国をほろぼしアジアを併どんしようとした日本帝国主義をうちやぶり、抗日戦争の最後の勝利をかちとった。

中国人民の抗日戦争は、ドイツ、日本、イタリアのファシズムに反対する世界戦争の重要な構成部分であった。中国人民は全世界人民および反ファシズム勢力の支持をうけた。中国人民も世界反ファシズム戦争の勝利に大きな貢献をした。

抗日戦争は、中国人民が百年らい、数えきれないほどくりかえしてきた帝国主義に反抗する戦争のなかで、はじめて完全な勝利をかちとった戦争である。この戦争は、たんに中国人民の革命

戦争の歴史だけでなく、帝国主義の侵略に反対する世界の被抑圧民族の戦争の歴史においても、きわめて重要な地位を占めている。

抗日戦争は、半植民地・半封建の弱国が帝国主義の強国にうち勝った戦争である。日本帝国主義がわが国の東北地方に侵入していらい、国民党は長いあいだ無抵抗主義をとっていた。抗日戦争の初期、日本帝国主義はその軍事的優勢に乗じて、一気にわが国の領土の奥深くまで侵入し、中国の半分を占領した。日本侵略者の大規模な進攻と全国人民の抗日の高まりに直面して、国民党は余儀なく抗戦に参加したが、まもなく、かれらは抗戦には消極的、反共には積極的という方針をとった。そこで、抗日戦争の重荷は、中国共産党の指導する八路軍、新四軍および解放区の人民の肩にのしかかってきた。八路軍と新四軍は、抗戦がはじまったころ、その数はわずか数万人にすぎず、兵器と装備もひじょうに劣っており、そのうえ長期にわたって日本帝国主義と国民党軍隊の両方からはさみ打ちをうけていた。だが、八路軍と新四軍は、戦えば戦うほどますます強くなり、日本帝国主義をうちやぶる主力軍となった。

なぜ弱国が、最後には、強国にうち勝つことができたのであろうか。なぜ見たところいかにも弱小な軍隊が抗日戦争の主力軍になることができたのであろうか。

そのもっとも根本的な原因は、抗日戦争が中国共産党と毛沢東同志の指導する真の人民戦争であり、マルクス・レーニン主義の正しい政治路線と軍事路線を実行したこと、八路軍と新四軍が真の人民の軍隊であり、毛沢東同志のさだめた人民戦争の一連のまとまった戦略・戦術を実行したことにある。

毛沢東同志の人民戦争にかんする一連の理論と政策は、マルクス・レーニン主義を創造的にゆたかにし、発展させた。中国人民の抗日戦争の勝利は、人民戦争の勝利であり、マルクス・レーニン主義の勝利であり、毛沢東思想の勝利である。

抗日戦争の以前に、中国共産党は一九二四年から一九二七年にかけての第一次国内革命戦争と一九二七年から一九三六年にかけての第二次国内革命戦争を経ており、戦争における勝利と失敗の経験と教訓を総括し、党内における毛沢東思想の指導的地位を確立した。これこそ、中国共産党が中国人民を指導して、抗日戦争の勝利をかちとった根本的な保証であった。

中国人民の抗日戦争の勝利は、全国的な権力を奪取するための条件をととのえた。一九四六年、国民党反動派がアメリカ帝国主義の後押しをうけて全国的な内戦をひきおこしたとき、中国共産党と毛沢東同志は人民戦争の思想をいちだんと発展させ、中国人民を指導していっそう大規模な人民戦争をおこない、わずか三年あまりのあいだに、人民解放戦争の偉大な勝利をかちとり、中国における帝国主義、封建主義、官僚資本主義の支配に終止符をうち、中華人民共和国を

樹立した。

中国人民の革命戦争の勝利は、帝国主義の東方戦線を突きやぶり、世界における力関係をきわめて大きく変化させ、各国人民の革命運動を促進した。それいらい、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動は新しい歴史的時期に入った。

こんにち、アメリカ帝国主義は、往年日本帝国主義が中国とアジアでやったことを、世界的な規模で、くりかえしている。アメリカ帝国主義とその手先に対抗するために人民戦争という武器を身につけ、これを活用することは、多くの国ぐにの人民にとって、すでにさしせまった必要となっている。アメリカ帝国主義とその手先は、百方手をつくして人民戦争の革命の烈火をもみけそうとくわだてている。フルシチョフ修正主義者も、まるで疫病をおそれるように人民戦争をおそれ、人民戦争に中傷を加えている。かれらは、互いに結託して、人民戦争を妨害し、破壊している。こうした状況のもとで、中国の人民戦争が偉大な勝利をかちとった歴史的経験をもう一度学び、毛沢東同志の人民戦争にかんする理論をもう一度学ぶことは、とくに大きな現実的意義をもっている。

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線

中国共産党と毛沢東同志が中国人民を指導して抗日戦争の勝利をかちとることができたのは、なによりもまず、マルクス・レーニン主義の路線をさだめ、それを実行したからである。

毛沢東同志は、マルクス・レーニン主義の基本原理をよりどころとし、階級分析の方法をもちいて、日本帝国主義が中国に侵入してからの中国における主要な矛盾と主要でない矛盾の転化、およびそれによってもたらされた中国の階級関係と国際関係の新しい変化を分析し、中日双方の力関係を分析して、抗日戦争の政治路線と軍事路線をさだめるうえに科学的な根拠をあたえた。

ずっと以前から、中国には二つの基本的な矛盾が存在していた。帝国主義と中華民族との矛盾、封建主義と人民大衆との矛盾がそれである。抗日戦争がぼっ発するまえまで、帝国主義、大地主、大ブルジョアジーの利益を代表する国民党反動集団と、中国人民の利益を代表する中国共産党およびその指導下にある労農赤軍とのあいだに十年にわたる国内戦争がおこなわれた。一九三一年、日本帝国主義は中国の東北地方を侵略・占領し、その後、とくに一九三五年以後、さらに一歩一歩と奥深く侵入して、中国にたいする侵略の拡大にいっそう力をそそいだ。日本帝国主義の侵入は、日本帝国主義と中華民族との矛盾を極度に鋭くさせ、国内の階級関係に新しい変化をもたらした。内戦を停止し、一致して日本に抵抗することが、全国人民のさしせまった要求となった。民族ブルジョアジーと国民党内の各派閥の政治的態度には、程度の差こそあれ、さまざ

まな変化があらわれた。一九三六年の西安事変①が、それをもっともよく物語っている。

中国の政治情勢の変化をどのように認識するか。こうした変化のなかからどのような結論をひき出すべきか。これは中華民族の生死存亡にかかわる問題であった。

抗日戦争ぼっ発前の一時期、中国共産党の内部において、王明を代表とする「左」翼日和見主義者が、一九三一年以後日本の侵略によってひきおこされた国内政治の重大な変化を目をつぶって見ようとせず、中日民族間の矛盾の地位の上昇や、各階層の抗日の要求を否定して、中国のあらゆる反革命的な党派、中間派およびあらゆる帝国主義はみな完全に一致している、と強調した。そして、あくまで閉鎖主義の路線を固執し、あらゆるものを打倒せよ、と主張しつづけた。

毛沢東同志は断固として「左」翼日和見主義の誤りとたたかい、中国革命の新しい情勢を深くつっこんで分析した。

「若干の「史的な問題」にかんする決議」

毛沢東同志はつぎのように指摘した。日本帝国主義が中国をその植民地にしようとしていることによって、中日間矛盾は主要な矛盾の地位にあがった。中国の国内における各種の階級矛盾、たとえば、人民大衆と封建主義との矛盾、農民と地主階級との矛盾、プロレタリアートとブルジョアジーとの矛盾、農民、都市小ブルジョアジーとブルジョアジーとの矛盾などは、依然として存在していたが、これらの矛盾は日本が中国侵略戦争をひきおこしたことによってことごとく

副次的な、従属的な地位にさがった。大地主、大ブルジョアジーのなかの親日派などひとにぎりの売国奴をのぞいて、全国の各階級、各階層の人民のあいだには、共通の要求が生まれた。日本帝国主義に反対するということがそれであった。

中日間矛盾が主要な矛盾の地位にあがったために、中国とイギリス、アメリカなどの帝国主義との矛盾も副次的な、従属的な地位にさがった。日本帝国主義が中国を日本一国の植民地にしようとしたために、かれらとイギリス、アメリカなどの帝国主義との矛盾は大きく拡大した。このために、中国はこうした矛盾を利用して日本帝国主義を孤立させ、それに反対することができるようになった。

日本帝国主義の侵略に直面して、ひきつづき国内戦争と土地革命をおこなうか、それとも民族解放の旗を高くかかげて、団結できるすべての勢力を団結させ、広範な民族統一戦線を結成し、集中して日本侵略者にたちむかうか。問題はこのように鋭く、わが党のまえに提起されていた。

中国共産党と毛沢東同志は新しい情勢にたいする分析にもとづいて、抗日民族統一戦線の路線をさだめた。わが党は民族解放の旗を高くかかげ、全国団結、一致抗日という主張をうちだし、全国人民から熱烈な支持をうけた。わが党および全国の愛国的な軍隊と人民の共同の努力によって、ついに国民党の支配集団は内戦の停止を余儀なくされ、国共合作、団結抗日の新しい局面が

持久戦について
選集2巻 P219~P221

あらわれた。

一九三七年の夏、日本帝国主義は全面的な中国侵略戦争をひきおこした。全国的規模の抗日戦争がぼっ発した。

抗日戦争が勝利できるかどうか。どうすれば勝利をかからとることができるか。これは中国人民がさしせまって回答を要求していた問題であった。

敗北主義者がとびだしてきていった。中国はとても日本には勝てない、亡国しかない、と。盲目的な楽観論者もとびだしてきていった。中国はすぐ勝てるだろう、そう大した骨を折らなくてもいい、と。

毛沢東同志は、中華民族と日本帝国主義というこの主要な矛盾の二つの側面を具体的に分析して、「亡国論」は誤ったものであり、「速勝論」は根拠のないものであり、抗日戦争は持久戦であって、最後の勝利は中国のものである、と指摘した。

毛沢東同志は、有名な『持久戦について』という著書のなかで、中日双方は戦争において、つぎのような互いに矛盾する特徴をもっていると指摘した。日本は帝国主義の強国ではあるが、日本帝国主義は死にひんした没落の時代にあり、そのひきおこした戦争は侵略的な、退歩的な、野蛮なものである。その人力、物力は不足しており、長期の戦争にたえることができない。国際的

には、正義にもとっているために、支持がえられない。中国は半植民地・半封建の弱国ではあるが、歴史的には進歩の時代にあり、そのおこなっている戦争は反侵略的な、進歩的な、正義のものである。中国は長期にわたる戦争をもちこたえるだけの人力、物力をもっている。国際的には、幅広い共鳴と支持をうけている。これが中日戦争の基本的な要因のすべてである。

毛沢東同志はまたつぎのように指摘した。これらの要因は戦争の過程でその作用を発揮するであろう。日本の長所は一時的なものであり、われわれの努力によって、それはだんだんと小さくなっていくであろう。日本の短所は基本的なものであり、克服できないものであり、それは戦争のなかでしだいに大きくなっていくであろう。中国の短所は一時的なものであり、だんだんと克服されていくであろう。中国の長所は基本的なものであり、戦争のなかでしだいに積極的な作用を発揮していくであろう。日本の長所と中国の短所は、中国が速勝できないことを決定づけている。中国の長所と日本の短所は、日本がかならず敗北し、最後の勝利は中国のものであることを決定づけている。

毛沢東同志はこのような分析にもとづいて、持久戦の戦略方針をさだめた。中国の抗戦は長期的なものであって、長期にわたる努力を払って、はじめて一歩一歩と敵を弱め、自分を強大にし、敵を強いものから弱いものに変え、自分を弱いものから強いものに変え、最後には敵をうち

やぶることのできる力を蓄積することができるのである、というのがそれである。毛沢東同志は、敵と味方の力の消長につれて、抗日戦争は、戦略的防御、戦略的対峙、戦略的反攻の三つの段階をたどるであろう、と指摘した。持久戦の過程は、ほかでもなく、人民を動員し、人民を組織し、人民を武装させる過程である。全人民が立ちあがり、人民戦争をおこなってこそ、はじめて抗戦を堅持し、日本侵略者をうちやぶることができるのである。

抗日戦争を真の人民戦争とするために、わが党はもっとも広範な人民大衆をよりどころとし、団結できるすべての抗日勢力を団結させ、抗日民族統一戦線を強化、拡大することを堅持した。わが党の基本路線は、思いきって大衆を立ちあがらせ、人民の力を強大にし、わが党の指導のもとに、侵略者をうちやぶり、新中国を建設することである。

抗日戦争は、中国の新民主主義革命の歴史的段階の一つである。抗日戦争におけるわが党の路線は、たんに抗日戦争の勝利をかちとるだけでなく、新民主主義革命の全国的な勝利のために基礎をきずくことであった。新民主主義革命を完成してこそ、はじめて社会主義革命をおこなうことができるのである。毛沢東同志はこうのべている。民主主義革命と社会主義革命という、「上下二章からなる論文は最初の章がうまく書けなければ、つぎの章もうまく書けるはずがない。民主主義革命を断固として指導することは社会主義の勝利をかちとる条件である」②と。

具体的な事物を具体的に分析し、具体的な矛盾を具体的に分析することは、マルクス・レーニン主義の真髄である。毛沢東同志は、からみあった複雑な矛盾のなかから、主要な矛盾をつかみだし、主要な矛盾の二つの側面を具体的に分析し、各種の矛盾をどのように認識し、どのように処理すべきかという問題を、なにものにも妨げられず、すばらしい勢いで、順調に解決した。

毛沢東同志は、まさにこうした科学的分析を基礎にして、抗日戦争の時期における人民戦争の政治路線と軍事路線を正しくさだめるとともに、農村根拠地を樹立し、農村をもって都市を包囲し、最後に都市を奪取するという思想をさらに発展させた。そのうえ政治、軍事、経済、文化などの各分野で人民戦争をおしすすめる一連の方針、政策および戦略・戦術をさだめ、それによって抗日戦争の勝利を保証し、新民主主義革命の全国的な勝利のための条件をととのえた。

統一戦線の路線と政策を正しく実行する

人民戦争の勝利をかちとるためには、もっとも広範な統一戦線を結成するとともに、基本大衆をあますところなく立ちあがらせることもできれば、団結できるすべての勢力を団結させることもできる一連の政策をもたなければならない。

抗日民族統一戦線は抗日の立場にたつすべての階級と階層をふくんでいた。これらの階級と階層は抗日による共同の利益をもっており、これが団結の基礎であった。しかし、これらの階級と階層の抗日の立場にはその強固さの上でそれぞれ程度の差があり、そのうえ、これらの階級と階層のあいだには互いに階級的矛盾が存在し、異なった利害の衝突が存在していた。このため、統一戦線内部の階級闘争はさけられないものであった。

党の抗日民族統一戦線の路線をさだめるにあたって、毛沢東同志はわが国社会の各階級をつぎのように分析している。

労働者、農民、都市小ブルジョアジーは、抗戦を最後までやりぬくことをだんことして要求している。かれらは抗日の主力であり、団結と進歩を求める基本大衆である。

ブルジョアジーには民族ブルジョアジーと買弁ブルジョアジーの区別がある。ブルジョアジーのなかで比較的数の多いのは民族ブルジョアジーで、かれらはかなり軟弱で、つねに動揺し、労働者とのあいだに矛盾があるが、かれらは反帝にたいしてある程度の積極性をもち、抗日戦争のなかではわれわれの同盟軍である。買弁ブルジョアジーとは、官僚ブルジョアジーのことで、かれらは、数こそひじょうに少ないが、中国で支配的な地位をしめている。かれらはそれぞれ異なった帝国主義によりかかっており、親日派もいれば、親英米派もいる。親日の買弁ブルジョアジーは降伏派であり、おおっぴらの、またはかくれた民族の裏切者である。親英米の買弁ブルジョアジーは、ある程度まで抗日に賛成するが、かれらの抗日はだんことしたものではなく、日本との妥協を切望しており、本質的には反共、反人民である。

地主には大、中、小の区別がある。いちぶの大地主は民族の裏切者になりさがっている。もういちぶの大地主は抗日に賛成しているが、ひじょうに動揺している。多くの中、小地主は抗日の要求をもっているが、かれらと農民とのあいだには矛盾がある。

このように複雑で、入り組んだ階級関係を前にして、わが党がとった統一戦線内部での活動方針は、団結もすれば、闘争もするという方針である。これはつまり、抗日の立場にたつすべての階級と階層を団結させるということであり、たとえ動揺的で、一時的な同盟者であってもそれを味方に獲得し、適切な政策をとって抗日の立場にたつそれぞれの階級と階層のあいだの相互関係を調整し、これを抗日の全般的任務に適応させるということである。同時に、わが党の独立・自主の原則を堅持し、自分たちの活動の重点を思いきって大衆を立ちあがらせ、人民の力を拡大強化することにおき、抗戦、団結、進歩に不利なすべての行為と必要な闘争をおこなうということである。

わが党の抗日民族統一戦線の方針は、すべてのものと連合し、闘争を否定するという陳独秀の

右翼日和見主義の方針とも違えば、すべてのものと闘争し、連合を否定するという王明の「左」翼日和見主義の方針とも違っている。わが党は、右翼と「左」翼の日和見主義の誤りの教訓を総括して、連合もすれば闘争もするという方針をつくりあげたのである。

国民党をも含めた抗日の立場にたつすべての党派、階層と連合してともに抗日闘争をすすめるために、わが党は一連の政策上の調整をおこなった。われわれは、孫中山の革命的三民主義を完全に実現するためにたたかうことを宣言した。われわれの陝西・甘粛・寧夏革命根拠地の政府は、中華民国陝西・甘粛・寧夏特別区政府と改称された。われわれの軍隊は、労農赤軍から国民革命軍第八路軍と新編第四軍にあらためられた。われわれの土地政策は、地主の土地の没収から小作料と利子の引きさげにあらためられた。われわれは根拠地において三・三制の政権③を実施して、抗日を主張し、しかも反共ではない小ブルジョアジー、民族ブルジョアジー、開明紳士の代表と国民党員を吸収し参加させた。そのほか、経済、税収、労賃、民族の裏切者の一掃、人民の権利、文化・教育などの面での政策も、抗日民族統一戦線の原則にもとづいて、必要で適切な変更をおこなった。

これらの政策上の調整をおこなうと同時に、われわれは、共産党、人民の軍隊、根拠地の独立性を堅持した。われわれはまた、国民党に、かならず全国総動員をおこない、政治機構を改革

し、民主主義を実行し、人民生活を改善し、民衆を武装し、全面的抗戦を実現するよう、だんと要求した。国民党の、消極的抗戦、積極的反共、人民の抗日運動にたいする圧迫および妥協と降伏などの陰謀活動にたいしては、われわれはだんこたる闘争をおこなった。

歴史の経験はわれわれにつぎのことを教えている。わが党が右の誤りを正したのちには、「左」の誤りが生まれやすく、わが党が「左」の誤りを正したのちには、右の誤りが生まれやすい。また、われわれが国民党支配集団と決裂したさいには、「左」の誤りが生まれやすく、われわれが国民党支配集団と連合したさいには、右の誤りが生まれやすい。

「左」翼日和見主義に反対し、抗日民族統一戦線をうちたてたのちのわが党内の主な危険は右翼日和見主義、つまり降伏主義であった。

第二次国内革命戦争の時期における「左」翼日和見主義の代表であった王明は、抗日戦争の初期にはもう一方の極端に走り、右翼日和見主義、すなわち降伏主義の代表となった。王明は徹頭徹尾の降伏主義路線と一連の極右政策をとって、毛沢東同志の正しい路線と政策に反対した。かれはみずからすすんで抗日民族統一戦線におけるプロレタリアートの指導権を放棄し、みずからすすんでこの指導権を国民党に渡そうとした。「すべては統一戦線を通して」、「すべては統一戦線にしたがう」というかれの主張は、実際には、すべては蔣介石と国民党を通し、それにし

たがう、ということにほかならなかった。かれは、思いきって大衆を立ちあがらせることに反対し、民主的改革をおこなうことに反対し、労働者・農民の生活を改善することに反対し、統一戦線の基礎である労農同盟を破壊した。かれは共産党の指導下にある人民革命勢力の根拠地を否定し、人民革命勢力を糸の切れたタコに変えようとした。かれは共産党の指導する人民の軍隊を否定し、人民の武装組織、すなわち人民のすべてを蔣介石に手渡そうとした。かれは党の指導を否定し、国、共両党の青年が同盟を結ぶことを主張して、共産党を浸食しようとする蔣介石の企みにそおうとした。かれは「たいそうめかしこんで、わざわざ向こうへ出かけていき」、なんらかの官職にありつこうと願った。王明のこうしたやり方は完全に修正主義的なものであった。もしもかれのこうした一連の修正主義の路線と政策にしたがって事をはこんだなら、中国人民は抗日戦争の勝利をかちとることができず、ましてその後の全国的な勝利などはありえなかった。

王明の修正主義路線は、抗日戦争のある時期には中国人民の革命事業に損害をもたらした。だが、毛沢東同志の指導的地位はすでにわが党中央において確立されていた。毛沢東同志の指導のもとに、全党のマルクス・レーニン主義者は王明の誤りにたいしてだんことしたたたかいをすすめ、時を移さずこうした誤りを正した。こうしてはじめて、王明のあやまった路線がさらに広範囲に、さらに長期にわたって党の事業に危害を与えるのを防いだのである。

われわれが王明の誤りを正すうえで、蔣介石というこの反面教師が、力を貸してくれた。蔣介石は大砲や機関銃でなん回もわれわれに講義をしてくれた。そのうち、もっともひどかったのは、一九四一年一月の皖南事変である。皖南に駐屯していた新四軍は、ある指導者が党中央の指示にそむいて、王明の修正主義路線をおしすすめたため、蔣介石の突然の襲撃にあってひどい損害をうけ、多くの勇敢な革命戦士が国民党反動派に虐殺された。こうした血の教訓によって、われわれの多くの同志たちは目がさめ、正しい路線とあやまった路線を見わける能力を高めたのである。

毛沢東同志は抗日民族統一戦線を実行、貫徹した全党の経験をたえず総括して、一連の政策を適時にさだめた。その主なものはつぎの通りである。

第一、抗日の立場にたつすべての人民（労働者、農民、兵士、知識層、商工業者）は連合して抗日民族統一戦線を結成する。

第二、統一戦線のもとにおける独立・自主の政策は、統一しなければならないと同時に、また独立していなければならない。

第三、軍事戦略面では、戦略的統一のもとでの独立した自主的な遊撃戦争をおこなう。それは基本的には遊撃戦であるが、有利な条件のもとでの運動戦もゆるがせにしない。

第四、蔣介石をかしらとする反共がん固派とたたかうときには、矛盾を利用し、多数を獲得し、少数に反対し、各個に撃破していく。そしてこれは、道理があり、有利であり、節度のあるものでなければならない。

第五、日本占領区と国民党支配区での政策は、一方ではできるだけ統一戦線の活動を発展させ、他方では、隠ぺいと精鋭化をはかる政策をとることである。つまり組織形態と闘争形態のうえで、隠ぺいと精鋭化をはかり、長期にわたって潜伏させ、力をたくわえて、時機を待つ政策をとることである。

第六、国内各階級の相互関係に対する基本政策は、進歩勢力を発展させ、中間勢力を獲得し、反共がん固勢力を孤立させることである。

第七、反共がん固派にたいしては革命の二面政策を実行し、なんとか抗日の立場にたとうとする側面に対してはそれと連合する政策をとり、あくまで反共の立場にたつ側面に対してはそれと闘争して孤立させる政策をとる。

第八、地主、ブルジョアジー、はては大地主、大ブルジョアジーにたいしても、みなそれぞれに分析をくわえ、区別をしなければならない。こうした区別にもとづいて、それぞれことなった政策をたて、それによって団結できるすべての勢力を団結させるという目的を達成する。

毛沢東同志のさだめた抗日民族統一戦線の路線とそれぞれの政策は、抗日戦争の試練を経て、それがまったく正しいものであることが実証された。

歴史は次のことを証明している。共産党は凶悪な帝国主義を前にして、すべての積極的要素を最大限に動員し、団結できるすべての勢力を最大限に団結させ、全民族の共同の敵を最大限に孤立させるためには、民族の旗を高くかかげ、この統一戦線の武器によって、全国の人口の九〇パーセント以上を占める人民大衆と愛国反帝の立場に立つすべての人びとを団結させなければならない。もしも、民族の旗を投げすて、閉鎖主義の路線をとり、自分を孤立させるならば、指導権とか人民の革命事業の発展など問題にならなくなる。それは客観的には敵に力を貸し、自分じしんを失敗させることにほかならない。

歴史は次のことを証明している。共産党は統一戦線のなかで、思想的、政治的、組織的独自性をあくまで確保し、独立・自主の原則を堅持し、指導権をあくまで確保しなければならない。統一戦線に参加する各階級の間には階級的差異が存在しているため、党は正しい政策をとって進歩勢力を発展させ、中間勢力を獲得し、がん固勢力に反対しなければならない。党の活動の重点は進歩勢力を発展させ、人民革命勢力を拡大強化する面におくべきである。こうしてはじめて、統一戦線を維持し、強化することができる。「闘争によって団結をもとめれば団結は存続するが、

譲歩によって団結をもとめれば団結は消滅する」。④これは、がん固勢力に反対する闘争の中でえたわれわれの主な経験である。

また、歴史は次のことを証明している。民族民主革命の中では統一戦線は二つの同盟をふくまなければならない。第一は労農同盟である。第二は、勤労人民とブルジョアジーおよびその他の非勤労人民との同盟である。労農同盟は労働者階級と農民および都市、農村のすべての勤労人民との同盟であり、これは統一戦線の基礎である。労働者階級が民族民主革命のなかで指導権を握ることができるかどうかのかぎは、農民を指導してたたかいに立ちあがらせ、広範な農民を自分のまわりに結集させることができるかどうかにある。労働者階級は農民に対する指導権をかちとり、労農同盟を基礎としてこそ、はじめて第二の同盟を結成することができ、はじめて広範な統一戦線を結成することができ、はじめて勝利のうちに人民戦争をおしすすめることができるのである。さもなければ、すべてが砂上の楼閣となり、机上の空論となり、あてにならないものになってしまう。

農民に依拠し、農村根拠地を樹立する

半植民地・半封建の中国では、農民が人口の八〇パーセント以上を占めていた。かれらは、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の三重の抑圧と搾取をうけており、抗日と革命にたいする強烈な要求をもっていた。人民戦争の勝利をかちとるには、主として農民にたよらなければならない。

わが党の多くの同志は、はじめからこの問題を認識していたわけではなかった。わが党の歴史のうえで、第一次国内革命戦争の時期に、陳独秀右翼日和見主義者の犯した主な誤りの一つは、ほかでもなく、かれらが農民問題の重要性を認識せず、農民をたちあがらせ、農民を武装することに反対したことである。第二次国内革命戦争の時期に、王明「左」翼日和見主義者の犯した主な誤りの一つもまた、かれらが農民問題の重要性を認識せず、農民のあいだで長期にわたる骨のおれる活動をおこなうことと、農村に革命根拠地をうちたてることの重要性を認識せず、大都市を早急に奪取し、革命の全国的勝利を早急にかちとろうという幻想をいだいたことである。右翼日和見主義と「左」翼日和見主義の誤りは、中国革命に重大な挫折と失敗をもたらした。

毛沢東同志は早くも第一次国内革命戦争の時期に、つぎのように指摘した。農民問題は中国革命のなかできわめて重要な地位を占めている。反帝・反封建のブルジョア民主主義革命は、事実上、農民革命にほかならない。農民闘争にたいする指導は、ブルジョア民主主義革命における中

国プロレタリアートの基本的任務である。

抗日戦争の時期においても、毛沢東同志はつぎのように強調した。農民は、プロレタリアートのもっともたよりになる、もっとも広範な同盟者であり、抗日戦争の主力である。軍隊の来源は主として農民である。長期の戦争をおこなうために必要な財力、物力も主として農民からくるものである。抗日戦争は主として農民に依拠し、もっとも広範に農民をたち上がらせこの戦争に参加させなければならない。

抗日戦争は、実質的にはわが党が指導した農民革命戦争にほかならない。わが党は、農民大衆をたちあがらせ、組織することによって、プロレタリアートと農民を結合させ、どんな強大な敵にも打ち勝つことのできるもっとも雄大な勢力をつくりあげたのである。

農民に依拠し、農村根拠地をうち立て、農村をもって都市を包囲し、最後に都市を奪取する。これが、中国革命の歩んできた勝利の道である。

毛沢東同志は、中国革命の特徴にもとづいて、農村の革命根拠地をうち立てることの重要性を指摘し、つぎのようにのべている。「強大な帝国主義と中国におけるその反動的同盟軍は、どうしても、長期にわたって中国の中心都市を占領しているので、もし革命の隊列が帝国主義およびその手先との妥協をのぞまず、あくまでたたかいつづけようとするなら、もし革命の隊列が自分

の力をたくわえ、きたえあげるとともに、力のたりないうちに強大な敵と勝敗を決する戦闘をさけようとするなら、都市を利用して農村地域を攻撃してくる凶悪な敵とたたかえるよう、また、長期の戦いのなかで一歩一歩革命の全面的勝利をたたかいとれるように、おくれた農村をすすんだ強固な根拠地にきずきあげ、これを軍事、政治、経済、文化のうえでの偉大な革命の陣地にきずきあげなければならない」⑤

第二次国内革命戦争の時期の経験が証明しているように、毛沢東同志のこの戦略思想によってことをはこんだ場合には、革命勢力はひじょうに大きく発展し、一区域一区域と赤色根拠地をうちたてることができた。その反対に、毛沢東同志のこの戦略思想にそむき、「左」翼日和見主義者の例のやり方を実行したときには、革命勢力は重大な損害をうけ、都市においてはほとんど一〇〇パーセントを失い、農村においては九〇パーセントを失った。

抗日戦争中、日本帝国主義の軍隊は、中国の多くの大都市と交通要路を占領したが、その兵力が不足していたため、どうしても広大な農村を占領することができなかった。農村はやはり敵の支配の弱い環であった。このことは、農村根拠地をうちたてるためにいっそう大きな可能性をあたえた。抗日戦争がはじまってまもなく、日本軍が中国の奥地になだれこみ、国民党軍がつぎつぎと敗退していたとき、わが党が指導していた八路軍、新四軍は、毛沢東同志の英明な策定にも

とづいて、多くの支隊に分れて勇敢に敵の後方にてい進し、広大な農村で根拠地をうち立てた。八年にわたる抗戦の間に、われわれは前後して華北、華中、華南に十九の抗日根拠地を樹立した。大都市と交通要路をのぞけば、敵後方の広大な地域はすべて人民の天下となった。

抗日根拠地において、われわれは民主改革をおこない、人民の生活を改善し、広範な農民大衆をたちあがらせ、これを組織した。各根拠地では、普遍的に抗日民主政権がうち立てられ、人民大衆が主人公としての民主的権利を獲得した。それと同時に、封建的搾取制度を弱め、人民生活を改善する「合理的に負担する」政策と「小作料と利子の引き下げ」の政策を実行した。こうして、農民大衆の積極性を大いに高めると同時に、各抗日階層にも配慮をし、これを団結させた。われわれは根拠地のいろいろな政策をさだめる場合にも、敵占領地区で活動をくりひろげるのに有利なように考慮を払った。

敵の占領している都市と農村にたいしては、われわれは合法闘争と非合法闘争とを結びつけ、そこの基本大衆とすべての愛国人士を団結させ、敵・かいらい政権を分化、瓦解させ、条件の熟するのを待って、内外あい呼応して敵に打撃をくわえる準備をととのえた。

わが党がうちたてた根拠地は、中国人民の抗日救国闘争の中心となった。これらの根拠地をよりどころとして、わが党は人民革命勢力を発展させ、これを強化し、長期にわたる抗戦を堅持

し、抗日戦争の勝利をおさめた。

もちろん、革命根拠地の発展は順風に帆をあげるようななまやさしいものではなかった。このような革命根拠地は敵にとってはきわめて大きな脅威であり、敵はかならず進攻してくるものである。根拠地の発展は、拡大、縮小、再拡大という曲折と反復の過程をたどらないわけにはいかなかった。一九三七年から一九四〇年にかけて、抗日根拠地は一億の人口を擁するまでに発展したことがあった。しかし、一九四一年から一九四二年にかけて、日本帝国主義が中国侵略兵力の大部分をくりだし、われわれの根拠地にたいして気ちがいじみた進攻をくわえ、これを無残に破壊した。同時に、国民党もまたわれわれの根拠地にたいして包囲、封鎖、はては軍事的進攻までおこなった。一九四二年には、抗日根拠地はわずか人口五千万以下にまで縮小してしまった。わが党は徹底的に人民大衆に依拠し、だんことして一連の正しい政策と措置をとったので、極度に困難な状況のもとでも、根拠地をまもりぬくことができた。こうした曲折を経て、根拠地の軍隊と人民は、いっそう強固なものに、鍛えあげられた。一九四三年から、われわれの根拠地は、また一歩一歩と回復し、拡大して、一九四五年には、人口一億六千万にまで発展した。中国革命の全過程において、革命根拠地の発展は多くの起伏を経、かずかずの試練にたえぬいて、やっと小さな、分断された根拠地から一歩一歩と大きな、一つにつながった根拠地へと発展し、波状的に

ひろがっていったのである。

革命根拠地の建設の過程は、全国的勝利にむけておこなわれた偉大な演習の過程でもあった。根拠地において、われわれは党を建設し、政権を樹立し、人民武装組織をつくり、大衆組織をつくり、工農業生産をおこない、文化・教育事業をおこし、一つの地区が独立してやってゆくに必要なすべての事業をやりとげた。われわれの根拠地は、実際には国家のヒナ型であった。根拠地の建設事業がしだいに発展するにつれて、わが党は強大な人民軍隊を鍛えあげ、各分野の活動にたずさわる幹部を養成し、各分野での活動の経験をつみ上げ、物質的、精神的な力をたくわえた。このことは全国的勝利のために有利な条件をととのえた。

抗日戦争中にうち立てられた革命根拠地は、中国人民が国民党反動派をうちまかすためにおこなった人民解放戦争の出発点となった。解放戦争の時期においても、われわれはやはり農村をもって都市を包囲し、最後に都市を奪取するという道をふんで、全国的な勝利をかちとったのである。

新しい型の人民の軍隊を建設する

「人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない」⑥。これは、長期にわたる革命闘争のなかで中国人民が血をもって得た経験にもとづいて、毛沢東同志が引き出した結論である。これはマルクス・レーニン主義の普遍的な真理である。

中国革命の特徴は武装した革命をもって武装した反革命に反対することである。主な闘争形態は戦争であり、主な組織形態は中国共産党の絶対的指導のもとにある軍隊であった。わが党の指導したその他のすべての組織と闘争はみな、直接または間接に、戦争と呼応してすすめられた。

第一次国内革命戦争の時期に、中国共産党の多くのすぐれた同志は、革命的武装闘争に積極的に参加した。だが、当時のわが党は、まだ幼年期にあって、中国革命のこの特徴にたいして、はっきりとした認識をもっていなかった。第一次国内革命戦争を経て、国民党が革命を裏切り、大量の共産党員を殺害し、あらゆる革命的大衆組織を破壊したのちになって、はじめてわが党は革命的武装組織をつくること、革命戦争の戦略・戦術を研究することがことのほか重要であることをわりにはっきりと認識し、労農赤軍を創設したのである。これが中国共産党の指導した最初の人民の軍隊であった。

第二次国内革命戦争の時期に、毛沢東同志の創設した労農赤軍はひじょうに大きく発展し、三十万人にたっした。だが、そののち「左」翼日和見主義の指導によって、誤った政治路線と軍事

路線が実行されたため、赤軍は九〇パーセントを失ってしまった。

抗日戦争がはじまったとき、中国共産党が指導していた人民の軍隊はわずか四万余りにすぎなかった。国民党反動派はあらゆる手をつくして、この人民の軍隊を制限し、弱め、消滅しようと企てた。このような状況のもとで、毛沢東同志はつぎのように指摘した。抗戦を堅持して日本侵略者を打ち破るためには、八路軍、新四軍およびわが党の指導するすべての遊撃隊を大々的に拡大し、強化しなければならない。全党はあげて戦争を重視し、軍事を学習しなければならない。すべての党員はいつでも武装して前線へ出られるよう準備をしなければならない、と。

毛沢東同志はまた、共産党員は個人の軍事的権力を争わないが、党の軍事的権力、人民の軍事的権力を争わなければならない、と鋭く指摘した。

革命武装力を拡大強化する党の正しい方針に導かれて、わが党の指導する八路軍、新四軍およびその他の抗日遊撃隊は、戦争がはじまると、ただちに抗日の最前線におもむいた。われわれは人民武装組織の火種を広大な敵の後方地区にばらまき、いたるところで遊撃戦争の炎を燃え上がらせた。われわれの人民の軍隊は戦闘のなかでたえず発展し、拡大強化し、抗日戦争終結のときには百万の大軍に成長し、しかも、そのほかに二百万の民兵をもっていた。だからこそ、われわれは抗日戦争中、中国を侵略した日本軍の六四パーセントとかいらい軍の九五パーセントを迎え

うち、中国の抗日戦争の主力軍になったのである。われわれは日本侵略軍を迎えうつと同時に、国民党反動派が一九三九年、一九四一年、一九四三年の三回にわたってひきおこした反共の高まりを撃退し、かれらがひきおこした無数の「摩擦」を粉砕した。

なぜ八路軍と新四軍は、抗日戦争のなかで、小から大になり、弱いものから強いものになり、偉大な勝利をかちとることができたのであろうか。

そのもっとも根本的な原因は、八路軍、新四軍が毛沢東同志の建軍思想にもとづいてうち立てられたものであり、誠心誠意人民に奉仕する新しい型の人民の軍隊であるからである。

毛沢東同志の人民の軍隊の建軍思想にみちびかれたわれわれの軍隊は、中国共産党の絶対的指導のもとにある軍隊である。この軍隊は、限りない忠誠心をもって、党のマルクス・レーニン主義の路線と政策を実行する。この軍隊は、高度の自覚的紀律をもっており、あらゆる敵を圧倒し、いかなる困難をも恐れない英雄的な気概をもっている。軍隊の内部では、幹部と戦士、上級と下級、各部門、各兄弟部隊は完全に一致団結している。軍隊の外部では、軍隊と人民、軍隊と地方政府も完全に一致団結している。

われわれの軍隊は抗日戦争中、毛沢東同志が規定した戦争、大衆活動、生産をおこなう三大任務をだんことして遂行し、戦闘部隊であると同時に工作隊でもあり、また生産隊でもあった。こ

れらの軍隊はいたるところで大衆に宣伝活動をおこない、大衆を組織し、大衆を武装し、大衆を助けて革命政権を樹立させた。これらの軍隊は三大紀律、八項注意を厳格に守り、擁政愛民運動をくりひろげ、いたるところで大衆のために良いことをした。わが軍はまたあらゆる可能性を利用して、みずから生産をおこない、それによって経済的困難を克服し、軍隊の生活を改善し、人民の負担を軽くした。わが軍はこうして自己の模範的行動によって、人民大衆から心から擁護され、広範な人民大衆からあふれるような親しみをこめて「自分たちの子弟の兵隊」と呼ばれたのである。

われわれの軍隊は自分の主力軍をもっているばかりでなく、自分の地方軍をもち、さらに民兵組織の建設と発展に大いに力を注ぎ、主力軍、地方軍、民兵という三者結合の武装力体制を実行した。

われわれの軍隊はまた、敵軍の将兵を味方に獲得し、捕虜を寛大にとりあつかう正しい政策をとった。抗日戦争中、われわれは大量のかいらい軍を帰順させ、これにほう起させたばかりでなく、ファシズム思想の害毒を深くうけていた多くの日本軍の捕虜を教育するのに成功した。かれらは自覚を高めたのち、日本人解放連盟、在華日本人反戦同盟、覚せい連盟などの組織をつくり、われわれに呼応して、日本軍を瓦解させるための活動をおこない、われわれといっしょになって日本軍国主義とたたかった。この活動のなかで、当時延安にいた日本共産党の指導者野坂参三同志は、われわれにひじょうに大きな援助をあたえてくれた。

毛沢東同志の建軍思想の基本的精神とは、人民の軍隊を建設するにあたって、政治をつよく前面におしだし、なによりもまず、政治面から軍隊を建設することに重点をおかなければならないということである。政治は統帥であり、魂である。政治工作はわが軍の生命線である。もとより人民の軍隊も、たえず兵器装備の改善と軍事技術の向上を重視しなければならない。しかし、人民の軍隊の戦争はたんに兵器や技術にたよっておこなわれるのではなく、いっそう重要なことは、政治にたより、指揮官と戦闘員のプロレタリア的な革命的自覚と勇敢な精神にたより、人民大衆の擁護と支持にたよっておこなわれるのである。

毛沢東同志の建軍路線を完全に実行したため、この軍隊はいつも、プロレタリア的な政治的自覚を大いに高め、毛沢東思想を学習する空気をみなぎらせ、士気を十分にふるい立たせ、団結をしっかりかため、敵にたいするにくしみを大いに深めることによって、巨大な精神力を生みだすことができた。そして戦闘に臨んで苦しみをいとわず、死をおそれず、突撃の必要があればただちに突撃し、守備の必要があればただちにがっちり守る。一人が数人、数十人、数百人分の働きをし、人間界のどんな奇跡でもつくりだすことができる。

以上のすべての点で、中国共産党の指導する人民の軍隊は、ブルジョアジーの軍隊、および搾取階級に奉仕し、少数の者に駆使され、利用されるすべての旧軍隊と根本的にことなっている。中国の人民戦争の実践的経験が証明しているように、毛沢東同志の建軍思想にもとづいてうち立てられた人民の軍隊は、このうえなく強力であり、無敵である。

人民戦争の戦略・戦術を実行する

エンゲルスは、「プロレタリアートの解放は、軍事的にもそれ自身の表現があり、そして、自己独特の、新しい作戦方法をあみだすであろう」⑦とのべたことがある。中国共産党の指導する中国の人民革命戦争は、エンゲルスのこの偉大な予言を実現した。われわれは、長期にわたる武装闘争の中で、味方の長所をもって敵の短所をつくことができる人民戦争の一連の戦略・戦術をあみだした。

抗日戦争の時期に、毛沢東同志は敵味方双方の状況分析にもとづいて、わが党が指導する八路軍、新四軍の戦略方針を、「基本的には遊撃戦であるが、有利な条件のもとでの運動戦もゆるがせにしない」⑧とさだめた。毛沢東同志が遊撃戦を戦略的な地位にまで高めたのは、敵と味方の

力がかけはなれている条件のもとで、革命の武装力が強大な敵にうち勝つには、敵と無理をおして渡り合うべきではなく、もし渡り合えば、かならず自分がひどい損失をうけ、革命に重大な挫折をもたらすからである。また遊撃戦をおこなって、はじめて全人民の力をあますところなく動員し、高度に発揮させて、敵にたちむかうことができ、戦争の中で自己を強大にし、発展させることができ、敵を消耗させ、弱めることができ、しだいに敵味方の力関係を変え、遊撃戦から運動戦にうつり、最後には敵に完全にうち勝つことができるからである。

毛沢東同志が早くも第二次国内革命戦争の初期にうちだした、「敵進我退、敵駐我擾、敵疲我打、敵退我追」（敵が進んでくれば味方は退き、敵が駐屯すれば味方はそれを攪乱し、敵が疲労すれば味方は攻撃をかけ、敵が退却すれば味方は追撃する）という十六字の秘訣は、遊撃戦の基本的戦術である。抗日戦争中に、遊撃戦術はいっそう発展をとげた。敵後方にある根拠地の軍隊と人民は、老幼男女をとわず、人という人、村という村がこぞって戦闘に身を投じ、スズメ戦⑨、地雷戦、地下道戦、破壊・襲撃戦、水上遊撃戦など各種各様の巧妙な戦法をあみだした。

抗日戦争末期と第三次国内革命戦争の時期になると、敵味方の力関係の変化にもとづいて、われわれの戦略方針は、遊撃戦を主とするものから運動戦を主とするものに変わった。第三次国内革命戦争の中期、とくに後期になると、われわれの作戦はすでに大規模な運動戦に発展した。し

かも、それは大都市にたいする攻略戦をふくんでいた。

せん滅戦は、われわれの作戦の基本的な指導思想である。運動戦を主とする場合にも、また遊撃戦を主とする場合にも、この指導思想をつらぬかなければならない。遊撃戦争のなかでは、破壊・襲撃・攪乱などの任務を多く遂行しなければならないのはいうまでもないことだが、やはり、あらゆる有利な条件のもとでのせん滅的な作戦を積極的に提唱し、それを実行するために努力しなければならない。運動戦では、どの戦闘においても優勢な兵力を集中して、敵を各個にせん滅することが要求される。毛沢東同志は、「撃破戦は、強大な敵にたいして勝敗を基本的に決するものではない。ところが、せん滅戦は、どんな敵にたいしても、たちどころに重大な影響をもたらす。人のばあいでも、十本の指を傷つけるより、一本の指を切りおとした方がよい。敵にたいしても、十個師団を撃破するより、その一個師団をせん滅した方がよい」⑩とのべている。せん滅戦によってのみはじめてもっとも効果的に敵に打撃をあたえることができるのである。これによって敵は一個旅団せん滅されれば一個旅団すくなくなり、一個連隊せん滅されれば一個連隊すくなくなり、これによって、敵軍の士気を沮喪させ、内部を瓦解させる。せん滅戦をおこなえば、わが軍は戦うごとに捕虜とろ獲品を得、士気は戦うごとに高まり、部隊は戦うごとに大きくなり、兵器は戦うごとによくなり、戦闘力は戦うごとに強くなる。

毛沢東同志は有名な十大軍事原則を提起したが、そのなかでつぎのように指摘している。「どの戦闘でも、圧倒的に優勢な兵力（敵の兵力の二倍、三倍、四倍、ときには五倍または六倍もの兵力）を集中して、四方から敵を包囲し、一兵も逃さないよう、極力完全せん滅をはかる。特殊な状況のもとでは、敵にせん滅的な打撃をあたえる方法をとる。すなわち、全力を集中し、敵の正面とその一翼あるいは両翼を攻撃して、その一部をせん滅し、他の一部を撃破する目的をとげ、それによって、わが軍が急速に兵力を移動させて、他の敵軍部隊を粉砕できるようにする。損得のつぐなわない、あるいは損得の相半ばするような消耗戦は極力さける。そうすれば、われわれは、全体的には、劣勢（数のうえからいえば）であっても、ひとつひとつの局部においては、またひとつひとつの具体的な戦役においては、絶対的優勢となるので、戦役の勝利が保障されることになる。時がたつにつれて、われわれは全体的にも優勢に転じ、ついには、いっさいの敵をせん滅するにいたるであろう」⑪毛沢東同志はまたつぎのように指摘している。さきに分散し、孤立した敵を打ち、あとで集中した、強大な敵を打ち、できるかぎり、運動戦のなかで敵をせん滅するようにする。準備のない戦いはやらず、自信のない戦いはやらない。戦闘中には、わが軍の長所とすぐれた戦闘作風を発揚しなければならない、と。これらはいずれも、せん滅戦をおこなう主な原則である。

敵をせん滅するには、敵を深くさそいこむ方針をとり、一部の都市や地方を主動的に計画的に放棄し、敵を引きこんでおいて打たなければならない。敵を引きこんでこそ、はじめて人民はさまざまな行動をとって作戦に参加することができ、人民戦争の威力を最大限に発揮することができる。敵を引きこんでこそ、はじめて敵に兵力をよぎなく分散させ、敵に重荷をせおいこませ、敵に誤ちをおかさせることができる。つまり、敵を有頂天にさせ、敵の十本の指をぜんぶ開かせ、敵の両足を泥沼におとしいれることができる。こうして、われわれは、優勢な兵力を集中し、敵を各個にせん滅し、敵をひと口ひと口食ってしまうことができる。敵の兵力をせん滅することによって、はじめて都市や地方を守りとおすことができ、あるいは奪取することができる。地方を失うのを恐れ、物をめちゃくちゃにされることを恐れるあまり、あちらこちらに兵力を分散させ、どこでも守勢におちいるような方法では、敵を消滅することはできないし、また、都市や地方を守りとおすこともできない。こうしたやり方はわれわれがだんこ反対するものである。

毛沢東同志は、人民戦争の戦略・戦術を、四つの句で高度な概括をおこなっている。きみたちはきみたちなりに戦い、われわれはわれわれなりに戦う、勝てるなら戦い、勝てないなら移動する、と。

これはつまりこういうことである。きみたちは現代化した兵器に依拠し、われわれは高い革命的自覚をもつ人民大衆に依拠する。きみたちはきみたちの優勢を発揮し、われわれはわれわれの優勢を発揮する。きみたちにはきみたちなりの戦法があり、われわれにはわれわれなりの戦法がある。きみたちがわれわれを打つばあいには、きみたちに打たれないようにし、つかみどころがないようにする。われわれがきみたちを打つばあいには、かならずきみたちを打てるようにし、正確に打ち、きみたちを食ってしまうようにする。われわれがきみたちを食ってしまえるときは食ってしまい、食ってしまえないときも、きみたちに食われないようにする。勝てるのに戦わないのは日和見主義であり、勝てないのに無理をおして戦うのは冒険主義である。われわれのすべての戦略、戦役の方針はいずれも打つというこの基本点のうえにうち立てられている。われわれが移動しなければならないと認めるのは、なによりもまず打たなければならないことを認めた条件のもとでのことである。すべての移動はいずれも打つためであり、最後に敵を徹底的に消滅するためである。このような戦略・戦術は、広はんな人民大衆に依拠してこそ、はじめて実行できる。しかも、このような戦略・戦術を実行すれば、人民戦争の優越性を十分に発揮させることができる。敵が技術的装備のうえでどんなに優勢であっても、敵がどんな方法でわれわれに立ち向かってこようとも、かれらは受身になってうちのめされる地位におかれるだけであって、主動権

はいつもわれわれの手中にある。

人民戦争の戦略・戦術を実行したことによって、われわれは最後には小から大へ、弱いものから強いものへと変わり、内外の強大な敵にうち勝ったのである。八年にわたる抗日戦争で、中国共産党が指導した人民の軍隊は、十二万五千回以上も対敵作戦をおこない、敵・かいらい軍百七十余万人を消滅した。三年にわたる解放戦争で、われわれは八百万の国民党反動軍隊を消滅し、偉大な人民革命の勝利をかちとった。

自力更生の方針を堅持する

中国人民の抗日戦争は、世界反ファシズム戦争の重要な一部分であった。反ファシズム戦争におけるすべての勝利は、世界各国人民が共同してたたかった結果である。日本帝国主義を打ちやぶる面で、スターリンをはじめとするソ連共産党の指導するソ連軍は、最後に参戦して重要な役割を果たした。朝鮮人民、ベトナム人民、モンゴル人民、ラオス人民、カンボジア人民、インドネシア人民、ビルマ人民、インド人民、パキスタン人民、マラヤ人民、フィリピン人民、タイ人民、そしてその他いくつかのアジア諸国の人民はみな、これに大きな貢献をした。アメリカ、オ

セアニア、ヨーロッパ、アフリカ各大陸の人民も、これに貢献した。

日本共産党と日本の革命的人民も、極度に困難な状況のもとで、勇敢にねばり強く闘争を堅持し、日本ファシズムをうちやぶるうえで、みずからの力をささげた。

各国人民は互いに支援しあい、励ましあって、共同の勝利をかちとった。だが、それぞれの国の解放は、やはりなによりもまず自国人民の努力によるものである。

中国人民の抗日戦争の勝利、そしてそれにつづく人民解放戦争の勝利は、各国人民の支持をうけたが、それは主として中国人民自身の努力によるものである。いちぶの人は、こともあろうに、中国の抗日戦争の勝利をまったく外国の援助によるものだ、といいくるめている。このようなデタラメな言い草は、日本軍国主義者の口振りとまったく軌を一にしたものである。

人民大衆は自分で自分を解放する。これはマルクス・レーニン主義の基本原理である。一国の革命、一国の人民戦争は、その国の人民大衆自身の事柄であり、それは主としてその国の人民大衆自身の力にたよるべきものであり、またそうしかできないものである。

抗日戦争の中で、わが党は、中国は自力更生を主とし、同時にできるだけ外国の援助をかちとるべきである、と主張した。われわれは国民党支配集団のとった、すべてを外国の援助にたよるという方針にだんことして反対した。国民党、蔣介石からみると、中国はなにもかもだめで、工

業もだめなら、農業もだめ、武器装備もだめであり、日本を打ちやぶろうとするなら、外国とくに米、英帝国主義にたよらなければならないのである。これはまったくの奴隷根性である。われわれの方針は国民党とまったく反対である。わが党は、米、英帝国主義と日本帝国主義との矛盾は利用することができるが、けっしてかれらにたよることはできない、と考えた。事実、米、英帝国主義は「極東のミュンヘン」の陰謀活動をくりかえしおしすすめ、中国を犠牲にして日本帝国主義と妥協しようとくわだてた。そのうえ、かなり長いあいだ、日本侵略者に軍需物資さえ提供した。抗戦の期間にアメリカ帝国主義が中国に与えた援助のなかにも陰険な下心が秘められていた。その目的は中国をその植民地に変えようとすることにあった。

毛沢東同志は、「中国の抗戦は主として自力更生に依拠する」⑫「われわれは外国の援助を希望するが、それにたよることはできず、自分の努力に依拠し、全軍隊、人民の創造力に依拠する」⑬と語った。

自力更生は、わが党の指導する人民の軍隊と解放区にとってはとくべつ重要な意味をもっていた。

抗日戦争の初期には、国民党政府はまだ八路軍や新四軍にわずかばかりの軍費を支給したが、後には一銭も支給しなくなった。日本帝国主義の気違いじみた進攻と残虐な掃討、国民党の軍事

包囲と経済封鎖、自然災害の襲来は、解放区をきびしい困難におとしいれた。とくに一九四一、一九四二年の二年間は、ほとんど着るものもなく、食べるものもなかった。

どうしたらよいのか。毛沢東同志はつぎのようにのべた。人類は昔からいったいどのように生活してきたのだろうか。それはやはり自分で手を動かして生きてきたのではないだろうか。こうした人類の子孫であるわれわれにどうしてこれぐらいの聰明さがないのだろうか。われわれはどうして自分で手を動かせないのだろうか、と。

解放区の軍隊と人民は、党中央と毛沢東同志がうちだした、「自分の手を動かして、衣食を豊かにする」、「経済を発展させ、供給を保障する」という方針にもとづいて、農業を主とする大規模な生産運動をくりひろげた。

困難というものはけっして征服できない怪物ではなく、みんなが自分で手を動かして征服すれば、困難は頭をさげてくる。国民党反動派は、われわれに軍費を支給しないで、経済封鎖を実施すれば、われわれを苦境においこむことができると考えた。だが、実際には反対に、それはわれわれを助けて、自力更生をうながし、困難を克服させたのである。われわれは一方で大生産運動をくりひろげると同時に、精兵簡政を励行し、人力、物力を節約した。これによって、きびしい物質的困難を克服し、勝利のうちに難関をのり越えたばかりか、人民の負担を軽減し、人民の生

活を改善して、抗日戦争の勝利のために物質的基礎をかためた。

武器装備の問題を解決する面では、われわれは自分でもいくらかの武器を製造したが、主として敵の武器を奪って自分を武装する方法にたよった。蔣介石、日本帝国主義者、アメリカ帝国主義者は、それぞれわれわれの「輸送大隊長」をつとめてくれた。帝国主義の兵器工場は、いつも被抑圧人民と被抑圧民族に武器を提供するものである。

八年余りにわたる抗日戦争においても、三年余りにわたる人民解放戦争においても、わが党の指導する人民の軍隊は、一貫して外部から物質的援助のない状況のもとで、独自に大規模な人民戦争をおしすすめ、偉大な勝利をかちとったのである。

毛沢東同志は、われわれの根本方針は自分の力という基点のうえにおかなければならない、と指摘している。自力更生に依拠してこそ、いかなる状況のもとでも不敗の地に立つことができるのである。

各国人民は、帝国主義とその手先に反対する闘争のなかで、つねに支援しあうものである。すでに勝利した国には、まだ勝利を得ていない人民を支持し、援助する義務がある。だが、いずれにしても、外国の援助は補助的な役割しか果たせない。

革命をやり、人民戦争をすすめ、しかも勝利をかちとろうとするならば、自力更生の方針を堅

持しなければならない。自国の人民大衆の力に依拠し、外部からのどのような物質的援助も断ち切られた状況のもとでも、独自に闘争をすすめる準備をしなければならない。もしも自分で努力を払わず、独立して自主的に自国の革命問題を考え、解決することをせず、自国の人民大衆の力に依拠しないで、ひたすら外国の援助にたよるならば、たとえそれが革命を堅持する社会主義国の援助にたよるのであっても、勝利をかちとることはできず、またたとえ勝利したとしても、この勝利をかためることはできない。

毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義

中国革命は偉大な十月革命の継続である。十月革命の道は、世界人民の革命の共通の道である。中国革命は十月革命とつぎの基本点において共通している。第一、どちらもマルクス・レーニン主義政党を中核とする労働者階級が指導したものである。第二、どちらも労農同盟を基礎としたものである。第三、どちらも暴力革命をつうじて権力を奪取し、プロレタリアート独裁をうちたてたものである。第四、どちらも革命が勝利したのち、社会主義制度を樹立した。第五、どちらもプロレタリア世界革命の一部分であった。

もちろん、中国革命には、中国革命独自の特徴がある。十月革命は帝国主義のロシアでおこったが、中国革命は半植民地・半封建の国でおこった。十月革命はプロレタリア社会主義革命であったが、中国革命は新民主主義革命の完全な勝利を経て、社会主義革命に転化したものである。十月革命は都市で武装蜂起をおこなったのちに、革命を農村におしひろめたものであったが、中国革命は農村をもって都市を包囲し、最後に都市を奪取して、全国的な勝利をかちとったものである。

毛沢東同志の偉大な功績は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を中国革命の具体的実践に結びつけるとともに、中国人民の長期にわたる革命闘争の経験にもとづいて、高度の概括と総括をおこない、マルクス・レーニン主義をゆたかにし、発展させたところにある。

毛沢東同志の人民戦争にかんする理論は、中国革命の長期にわたる実践の検証によって、それが人民戦争の客観的な法則に合致するものであり、無敵のものであることが実証された。それは中国にあてはまるばかりでなく、世界の各被抑圧民族と各被抑圧人民の革命闘争にたいする偉大な貢献である。

中国共産党の指導した人民戦争は、抗日戦争、国内革命戦争をふくめて、二十二年の長きにわたった。これは、こんにちの世界でプロレタリアートの指導した、もっとも時間の長い、もっとも闘争のこみ入った、もっとも経験のゆたかな人民戦争であった。

プロレタリア革命にかんするマルクス・レーニン主義の学説は、とどのつまり、革命の暴力で政治権力を奪取するという学説であり、人民戦争で反人民戦争にたちむかうという学説である。マルクスは、「暴力はすべての旧社会が新しい社会をはらむときの助産婦である」⑭と見事にのべている。

毛沢東同志はまさに中国の人民戦争の経験にもとづき、もっともわかりやすい、もっとも生き生きとした言葉で、要約的に、「鉄砲から政権が生まれる」⑮という有名な命題を提起した。

毛沢東同志は、「革命の中心任務と最高の形態は武力による政治権力の奪取であり、戦争による問題の解決である。このマルクス・レーニン主義の革命的原則は普遍的に正しく、中国においても外国においても、一様に正しい」⑯と明確に指摘した。

戦争は帝国主義と搾取制度の産物である。レーニンは、「戦争は、いつ、どこでも、つねに搾取者、支配者、抑圧者階級によってひきおこされるものである」⑰とのべている。帝国主義が存在し、搾取制度が存在しているかぎり、帝国主義と反動派はつねに武装力にたよってかれらの反動的支配を維持し、つねに戦争を被抑圧民族と被抑圧人民におしつけようとするものである。それは、人びとの意志によって変えることのできない客観的な法則である。

こんにちの世界において、アメリカをかしらとする帝国主義とその手先は、例外なく、かれらの国家機構、とくに軍隊を強化している。アメリカ帝国主義ともなれば、なおさら、いたるところで武力侵略をすすめ、いたるところで武力弾圧をおこなっている。

帝国主義とその手先の侵略戦争と武力弾圧に直面して、被抑圧民族と被抑圧人民は、いったいどうすればいいのだろうか。頭を下げて降伏し、永遠に奴隷となるか、それとも、奮起して反抗し、解放をかちとるか。

毛沢東同志は、生き生きとした言葉で、この問題に答えている。毛沢東同志はいう。中国人民は長いあいだの調査、研究によって、帝国主義とその手先が「手に刀をもっていて、人を殺そうとしている」のを発見した。「それがわかったので、人民もそのやり方でやっていく」⑱と。相手のやり方にならって相手をやっつけるのである。

要するに、帝国主義とその手先の武力侵略と武力弾圧に直面して、まっこうからたたかう勇気があるかどうか、人民戦争をおこなう勇気があるかどうかということは、革命をおこなう勇気があるかどうかという問題である。この問題は、真の革命かそれともニセの革命か、真のマルクス・レーニン主義かそれともニセのマルクス・レーニン主義かをためす、もっとも効き目のある試金石である。

いちぶの人びとのなかに帝国主義と反動派をおそれるおく病な考えがあることにたいして、毛沢東同志は、「帝国主義とすべての反動派はハリコの虎である」という有名な命題を提起した。毛沢東同志はつぎのようにのべている。「すべての反動派はハリコの虎です。反動派は、見たところ、おそろしそうでも、実際には、なにもたいした力はもっていません。ながい目で見れば、ほんとうに強大な力をもっているのは、反動派ではなくて、人民です」⑲

中国の人民戦争とその他の国ぐにの人民戦争の歴史が力強く証明しているように、人民の革命勢力が弱いものから強いものになり、小から大になるのは、階級闘争の発展の普遍的な法則であり、人民戦争の発展の普遍的な法則である。人民戦争の発展過程では、数多くの困難、曲折、失敗を避けることはできないにしても、人民戦争がかならず勝利するという全般的ななりゆきは、いかなる力をもってしても変えることができないのである。

毛沢東同志は、戦略的には敵を蔑視し、戦術的には敵を重視しなければならない、と指摘している。

戦略的に敵を蔑視することは、革命家にたいする最低限の要求である。もしも、敵を蔑視し、敢然と勝利をかちとる英雄的な気概がなかったならば、革命をおこなうなどということは、全然問題にならないし、人民戦争をおこなうなどということも全然問題にならないし、勝利をかちと

るなどということは、なおさら問題にならない。

戦術的に敵を重視することは、革命家にとって、やはりひじょうに大切なことである。もしも、戦術的に敵を重視せず、それぞれの国の革命の具体的実践において、個々の具体的な闘争の問題において、具体的な状況を研究せず、慎重な態度をとらず、闘争の芸術を研究せず、適切な闘争形態をとらなければ、人民戦争はやはり勝利をおさめることができない。

弁証法的唯物論と史的唯物論は、われわれにこう教えている。もっとも重要なのは、現在はいかにも堅固そうだが、すでに衰亡しはじめているものではなくて、現在は堅固そうでなくても、いま生まれつつあり、発展しつつあるものである。なぜなら、いま生まれつつあり、発展しつつあるものこそ、うち勝つことのできないものだからである。

なぜ、いかにも弱そうにみえる新生の勢力がいつもうわべは強そうな腐敗した勢力にうち勝つことができるのだろうか。それは真理がかれらの側にあり、人民大衆がかれらの側に立っているからである。ところが、反動的階級は、つねに人民大衆から離れ、人民大衆と対立しているのである。

中国革命の勝利はこの点を実証している。革命の全歴史、階級闘争の全歴史、人類の全歴史も、みなこの点を実証している。

帝国主義者は、「帝国主義とすべての反動派はハリコの虎である」という毛沢東同志の理論を極度におそれており、修正主義者もこの理論を極度に憎んでいる。かれらはみな、この理論に反対し、攻撃を加えている。いちぶの俗物どももそれにならって、この理論をあざ笑っている。だが、そうしたからといって、この理論の価値をいささかもひき下げることはできない。真理の光は、いかなるものも、それをおおいかくすことはできない。

毛沢東同志の人民戦争にかんする理論は、敢然と人民戦争をおこなうという問題を解決したばかりでなく、どのように人民戦争をおこなうかという問題をも解決した。

毛沢東同志は、みごとに戦争の法則にもとづいて戦争を指導することのできる偉大な政治家であり、軍事家である。毛沢東同志のさだめた人民戦争の路線と政策、戦略と戦術は、中国人民を指導して、きわめて複雑な、きわめて困難な状況のもとで、前進する航路のうえに横たわっていたすべての暗礁を避けさせ、人民戦争という巨大な船を勝利の彼岸に横づけさせた。

ここで、とくに指摘しておかなければならないのは、農村の革命根拠地を樹立し、農村によって都市を包囲するという毛沢東同志の理論が、こんにちの世界におけるすべての被抑圧民族、被抑圧人民の革命闘争、とりわけアジア、アフリカ、ラテンアメリカの被抑圧民族、被抑圧人民の、帝国主義とその手先に反対する革命闘争にとって、いっそうきわだった普遍的な現実的意義

をもっていることである。

現在、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの国ぐにと人民は、アメリカをかしらとする帝国主義とその手先によって、はげしい侵略と奴隷的な圧迫をうけている。政治、経済の基本的な状況で旧中国と多くの共通点をもっている国が少なくない。それらの国ぐにの農民問題は、中国と同様、きわめて大きな重要性をもっている。農民は帝国主義とその手先に反対する民族民主革命の主力である。帝国主義はこれらの国ぐにを侵略するばあい、まず大都市と交通要路を占領するのがつねである。だが、かれらは広大な農村をどうしても完全におさえることができない。農村、農村こそ、革命家の自由自在に活動できる広びろとした天地である。農村、農村こそ、革命家が最後の勝利に向かって進軍する革命の基地である。それだからこそ、農村の革命根拠地を樹立し、農村をもって都市を包囲するという毛沢東同志の理論が、これらの地域の人民のあいだで、ますます大きな吸引力をもつようになっているのである。

世界的な視野から問題をみたばあい、北アメリカ、西ヨーロッパを「世界の都市」というなら、アジア、アフリカ、ラテンアメリカは「世界の農村」ということになる。第二次世界大戦後、北アメリカ、西ヨーロッパの資本主義諸国のプロレタリア革命運動は、さまざまな原因によって一時おくらせられているが、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の革命運動はすばらし

い勢いで発展してきた。こんにちの世界革命も、ある意味では、やはり農村による都市の包囲という形勢にある。世界の革命事業全体は、結局、世界人口の圧倒的多数を占めるアジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の革命闘争によって左右されてゆくのである。社会主義諸国は、当然、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の革命闘争への支持を自分の国際主義的な責務としなければならない。

十月革命は被抑圧民族の革命の新しい時代をきりひらいた。十月革命の勝利は、西方のプロレタリア社会主義革命と東方の植民地・半植民地諸国の民族民主革命のあいだに橋をかけた。中国革命は、植民地・半植民地諸国において民族民主革命をどのようにして社会主義革命につながらせるかという問題を解決した。

毛沢東同志は、十月革命後の時代では、どんな植民地・半植民地国におこった反帝革命も、もはや、ふるいブルジョアジーと資本主義の世界革命の一部分ではなく、新しい世界革命の一部分、すなわちプロレタリアートの社会主義的世界革命の一部分である、と指摘した。

毛沢東同志は、完ぺきな新民主主義革命論を提起した。つまり、新民主主義革命は他のどんな革命でもなく、それはプロレタリアートの指導する、人民大衆の、帝国主義、封建主義、官僚資本主義に反対する革命でしかなく、またそうでなくてはならない、と指摘した。

これをいいかえると、この革命においては、他のどんな階級、他のどんな政党も指導者になることができず、プロレタリアートとマルクス・レーニン主義によって武装された真の革命政党だけが指導者になることができるのであり、また、そうでなければならないということである。

これをいいかえると、この革命に参加するものには、労働者、農民、都市の小ブルジョアジーがふくまれているだけでなく、民族ブルジョアジーや、帝国主義に反対するその他の愛国的、民主的な人びともふくまれているということである。

これをいいかえると、この革命がたちむかわなければならない敵は、帝国主義、封建主義、官僚資本主義であるということである。

新民主主義革命の前途は資本主義ではなく、社会主義である。

毛沢東同志の新民主主義革命にかんする理論は、マルクス・レーニン主義の革命段階論でもあり、マルクス・レーニン主義の連続革命論でもある。

毛沢東同志は、民族民主革命と社会主義革命の二つの段階を正しく区別すると同時に、両者を正しく密接なつながりをもたせた。民族民主革命は社会主義革命のための必要な準備であり、社会主義革命は民族民主革命の発展の必然的ななりゆきである。この二つの革命の段階のあいだには、けっして万里の長城が横たわっているのではない。しかし、民族民主革命を完成してから

でなければ、社会主義革命について語ることはできない。民族民主革命が徹底的に完成されればされるほど、ますます社会主義革命のために前提をつくりだすことができる。

中国革命の経験があきらかにしているとおり、民族民主革命の任務は、長期にわたってくりかえしおこなわれる闘争を経て、はじめて完成できるのである。この革命の段階では、帝国主義とその手先が、もっとも主要な敵である。帝国主義とその手先に反対するたたかいのなかでは、民族ブルジョアジーやあらゆる愛国的な人びとをふくめたすべての反帝愛国勢力を、もっとも幅広く団結させなければならない。反帝闘争に参加したブルジョアジーやその他の搾取階級の中のすべての愛国的な人びとは、歴史上、みな進歩的な役割を果たしたのであって、帝国主義には容れられなかったが、プロレタリアートからは歓迎されたのである。

民族民主革命と社会主義革命というこの二つの段階を混同することは、このうえもなく有害である。毛沢東同志は、いわゆる「両者を一度になしとげる」という誤った観点を批判して、こうした空想は当時もっともさしせまっていた、帝国主義とその手先に反対する闘争を弱めるだけである、と指摘した。抗日戦争の時期における国民党反動派とかれらのおかかえのトロッキストは、中国革命の二つの段階を、なおさら、故意に混同させ、「一次革命論」なるものをさかんに宣伝し、共産党のない「社会主義」を実行しようとした。かれらはこうしたデタラメな論調で共

産党をほろぼし、すべての革命を根底から絶滅し、民族民主革命の前進を妨げようと企み、そのうえ、それを帝国主義とたたかわず、帝国主義に降伏する口実にした。こうした反動的な論調は、とっくの昔に、中国革命の歴史によって葬り去られてしまった。

現在、フルシチョフ修正主義者は、プロレタリアートがいなくても、またプロレタリアートの先進的な思想によって武装された真の革命政党がなくても、社会主義がやれるといった論調をさかんに宣伝し、マルクス・レーニン主義の基本原理をはるかかなたに投げすててしまった。かれらがこのような論調をふりまくねらいは、ほかでもなく、帝国主義とたたかう被抑圧民族の闘争目標をそらし、民族民主革命を破壊して、帝国主義のために労をとることにある。

中国革命は、プロレタリアートの指導のもとで民族民主革命を徹底的におしすすめた成功の経験を提供し、プロレタリアートの指導のもとで時を移さず民族民主革命を社会主義革命に転化させた成功の経験を提供した。

毛沢東思想は中国革命の勝利の指針である。毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を中国革命の具体的実践と結びつけ、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させ、マルクス・レーニン主義の兵器庫に新たな兵器をそえた。

われわれの時代は、世界の資本主義と帝国主義が滅亡に向かい、社会主義と共産主義が勝利に

向かう時代である。毛沢東同志の人民戦争にかんする理論は、たんに中国革命の産物であるばかりでなく、時代の特徴をもそなえている。第二次世界大戦後における各国人民の革命闘争の新しい経験はたえまなく、毛沢東思想が世界の革命的人民の共同の財産であることを証明している。これが毛沢東思想のもつ偉大な国際的意義である。

人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先にうち勝つ

第二次世界大戦後、アメリカ帝国主義はドイツ、日本、イタリアのファシズムの地位にとってかわり、全世界をその隷属と支配のもとにおき、アメリカ大帝国をうち立てようとしている。アメリカ帝国主義はやっきになって日本軍国主義と西ドイツ軍国主義を育成し、世界大戦をひきおこすための主な手下に仕立てあげている。そしてオオカミのように各国人民をくるしめ、奴隷あつかいにし、各国人民の財貨を奪いとり、他国の主権を犯し、他国の内政に干渉している。アメリカ帝国主義は人類の歴史はじまって以来もっとも狂暴な侵略者であり、世界人民の共同のもっとも凶悪な敵である。革命をもとめ、独立をもとめ、平和をもとめる全世界のすべての人民と国ぐには、その闘争の主なほこ先をアメリカ帝国主義に向けないわけにはいかない。

かつて日本帝国主義がとった中国をほろぼす政策が、中国人民にもっとも広範な統一戦線を結成させ、日本帝国主義に反対する可能性をあたえたように、いま、世界制覇をたくらんでいるアメリカ帝国主義の政策も同様に、全世界人民に、団結できるすべての勢力を団結させ、もっとも広範な統一戦線を結成させて、集中的にアメリカ帝国主義に反対する可能性をあたえている。

いま、全世界人民を一方とし、アメリカ帝国主義とその手先を他方としておこなわれているはげしいたたかいの主な戦場は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの広大な地域である。世界全体からみれば、これらの地域は、帝国主義の抑圧のもっともひどい地域であると同時に、帝国主義の支配のもっとも弱い地域でもある。戦後、これらの地域にあらわれ、ますますたかまってきた革命のあらしは、いま、アメリカ帝国主義に直接的な打撃をあたえるもっとも重要な力となっている。アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の革命的人民とアメリカをかしらとする帝国主義との間の矛盾は、こんにちの世界の主要な矛盾となっている。この主要な矛盾の発展は、アメリカ帝国主義とその手先に反対する全世界人民の闘争をおし進めている。

第二次世界大戦後、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ地域では、人民戦争がますますその威力を発揮している。中国人民、朝鮮人民、ベトナム人民、ラオス人民、キューバ人民、インドネシア人民、アルジェリア人民およびその他いくつかの国ぐにの人民はみな、帝国主義とその手先

に反対する人民戦争をおこない、偉大な勝利をかちとった。これらの人民戦争は、それを指導した階級も、大衆を立ちあがらせたその幅の広さと深さも、またかちとった勝利の大きさもそれぞれ異なってはいるが、これらの人民戦争の勝利は、帝国主義の力を大いに弱め、それをけん制し、世界戦争をひきおこそうとするアメリカ帝国主義の計画に打撃をあたえており、世界平和を守る強大な要因となっている。

こんにち、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の革命的人民がアメリカ帝国主義とその手先に反対して人民戦争をおこなう条件は、以前よりずっと有利となっている。

第二次世界大戦を経、戦後の革命の高揚期を経て、各国人民の自覚の程度と組織化の程度はひじょうに高まり、各国人民の相互支援の力も大いに強化された。資本主義的帝国主義体制全体はすでに大いに衰退し、いまや、ますますはげしい動揺と崩壊の過程にある。第一次世界大戦ののち、帝国主義はもはや新しく生まれた社会主義ソ連を消滅することができなかったとはいえ、その支配している世界では、まだいくつかの国の人民の革命運動を弾圧し、一時的に相対的な安定期を実現させることができた。だが、第二次世界大戦後においては、帝国主義は一連の国ぐにが社会主義の道を歩むのを阻止できないばかりでなく、その支配している世界においてさえ、すさまじい勢いで押しよせる人民の革命運動の潮流をもはやおしとどめることができなくなった。

アメリカ帝国主義は歴史上のいかなる帝国主義よりもずっと強大であるが、また、ずっと虚弱でもある。アメリカ帝国主義はアメリカ人民をもふくめた全世界人民と敵対する地位に立っている。アメリカ帝国主義の人力、軍事力、物力、財力は、世界制覇をたくらむその野望とくらべるならば、どれもこれもはるかに不足している。世界で占領している地域はこれほど多く、手はこのように長くのび、十本の指はこのようにいっぱいに開き、力はこのように分散し、後方はこのように遠く離れ、輸送線はこのように長くのびて、アメリカ帝国主義は、いっそう自分自身を弱めている。毛沢東同志が語ったように、「アメリカ帝国主義はひとつの地域を侵略するごとに、新たなナワを自分の首にしばりつけている。アメリカ帝国主義はすでに全世界人民の重囲の中におちこんでいる」⑳

アメリカ帝国主義は、他国を侵略するにあたって、その一部の力を使うことができるだけであり、本土を遠く離れて不正義の戦争をやっているので、士気はさがり、困難は山積している。侵略をうけている人民は、ワシントンやニューヨークまで出かけていって、アメリカ帝国主義と力くらべをするのでもなければ、ホノルルやフロリダまで出かけていって、アメリカ帝国主義と力くらべをするのでもなく、自分たちの国土で独立と自由のためにたたかっているのである。かれらはひとたび広範に動員されて立ち上がると、無限の力を発揮する。こうなると、もはや優勢は

アメリカの側にあるのではなく、侵略をうけた人民の側にある。一見弱そうに見える人民も、実際には、アメリカ帝国主義よりはるかに強大なのである。

アメリカ帝国主義に反対する各国人民の闘争は、互いに支持しあうものである。これらの闘争がひとつに合流して、アメリカ帝国主義に反対する世界的な奔流となっている。ある地域の人民戦争が勝利のうちに発展すればするほど、ますますアメリカ帝国主義の力をより多くけん制し、消耗させることができる。アメリカ侵略者は、ある地域の情勢が緊迫すると、その他の地域に対しては力をゆるめざるをえなくなる。こうなると、その他の地域の人民はよりいっそう有利な条件のもとで、アメリカ帝国主義とその手先に反対する闘争をくりひろげるのである。

この世のあらゆる事物はみな分断することができる。アメリカ帝国主義というこの巨大なしろものもまた分断することができ、それを分断してうちやぶることができる。アジア、アフリカ、ラテンアメリカその他の地域の人民は、そちらがアメリカ帝国主義の頭をうてば、こちらがアメリカ帝国主義の足をうつという具合に、ひと口ひと口アメリカ帝国主義を食ってしまい、一部分、一部分それを消滅していく。アメリカ帝国主義が世界各国人民、とくにアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国人民が立ちあがって人民戦争をおこなうことをもっともおそれており、人民戦争を自分にたいする致命的な脅威と見なしているのも、そのわけはつまりここにあるのである。

アメリカ帝国主義が人をおどすために使っているのは、ほかでもなくその核兵器である。だが、核兵器はかれらの命を救うことはできない。核兵器は決してかるがるしく使えるしろものではない。日本に二つの原子爆弾を投下したアメリカ帝国主義の凶悪きわまる犯罪行為は、ずっと全世界人民に非難されてきた。もしアメリカ帝国主義がふたたび核兵器を使うならば、みずからを極度に孤立した地位におとしいれることになるだろう。しかも、核兵器に対する独占的地位はとっくのむかしにくずれさっている。アメリカ帝国主義は核兵器をもっているが、他の国ももっている。かれらが核兵器を使って他の国を威かくしようとすれば、自国を核兵器の脅威にさらすことになるであろう。こうして、かれらは世界各国人民からはげしく反対されるばかりでなく、自国人民からも、かならず、はげしい反対をうけるであろう。たとえ、アメリカ帝国主義があえて核兵器を使用しようとも、不屈の人民を征服しうるものではない。

近代兵器と技術的装備がいかに発達しようとも、また近代の戦法がいかに複雑であろうとも、戦争の最後の勝敗は、とどのつまり、地上部隊の連続的な戦闘によって決まり、戦場における白兵戦によって決まり、人間の自覚、勇敢さ、犠牲的精神によって決まるのである。この点で、アメリカ帝国主義の弱点はあますところなく暴露され、革命的人民の優位は最大限に発揮されるのである。アメリカ帝国主義の反動的軍隊には、革命的人民のような勇敢さや犠牲的精神などというものはありえない。革命的人民の精神的原子爆弾は、物質的原子爆弾よりはるかに強大であり、はるかに役だつものである。

侵略をうけた人民が人民戦争でアメリカ帝国主義をうちまかすことができるという点で、当面のもっとも説得力に富んだ実例はベトナムである。アメリカは南ベトナムを人民戦争鎮圧の実験場にしている。アメリカはこの実験をすでになん年もやっているが、いまではだれの目にもあきらかなように、アメリカ侵略者は人民戦争にどんな方法で対処すべきか見当もつかない有様である。ところが、ベトナム人民はアメリカ侵略者に反対するたたかいの中で、人民戦争の威力をあますところなく発揮している。アメリカ侵略者はベトナム人民戦争のなかで破滅的な災難に直面している。かれらは、ベトナムにおける失敗が連鎖反応をおこすのではないかとびくびくしている。かれらはいま戦争を拡大して、敗勢のばん回をくわだてている。だが、戦争が拡大すればするほど、それによってひきおこされる連鎖反応もますます大きくなっていく。また、戦争をエスカレートさせればさせるほど、転落はますますひどくなり、失敗はますますみじめになる。世界のその他の地域の人民は、アメリカ帝国主義はうちまかすことができるものであり、ベトナム人民がやれることは、自分たちにもやれるということをいっそうはっきり見てとるであろう。

歴史はつぎのことをすでに実証してきたし、今後もまたひきつづき実証するであろう。人民戦

争はアメリカ帝国主義およびその手先に対処するもっとも効果的な宝器である。全世界の革命的人民は、人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先に対処することを学びとり、兵器をもたない状態から兵器をもつようになり、戦争のやり方を知らない状態から戦争のやり方を学びとるようになり、人民戦争をうまくやれない状態からうまくやれるようになるであろう。ところかまわずあばれまわるアメリカ帝国主義というこの野牛は、ついには、自分で火をつけた人民戦争の烈火のなかで焼き殺されてしまうであろう。

フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切者である

アメリカ帝国主義が人民戦争をもっともおそれ、どうしてもそれに対抗できないでいる、ちょうどそのときに、フルシチョフ修正主義者が乗りだしてきてアメリカ帝国主義に力を貸している。フルシチョフ修正主義者はアメリカ帝国主義とぴったり呼吸を合わせて、人民戦争に反対するさまざまの論調を必死になってふりまき、いたるところで陰に陽に人民戦争を破壊する陰謀活動をすすめている。

フルシチョフ修正主義者が人民戦争に反対するのは、根本的には、かれらが人民大衆を信頼せず、アメリカ帝国主義をおそれ、戦争をおそれ、革命をおそれているからである。かれらはあらゆる日和見主義者と同様、まったく人民大衆の力が見えず、革命的人民が帝国主義にうち勝つことができるのだということをまったく信じていないのである。かれらはアメリカ帝国主義の核恐かつに屈服し、被抑圧人民と被抑圧民族が立ちあがって人民戦争をおこなったり、社会主義諸国の人民がアメリカ帝国主義の侵略に反撃を加えたりすれば、アメリカ帝国主義を怒らせ、かれら自身がまきぞえを食い、ソ米協力で世界を牛耳るというかれらの甘い夢の実現が妨げられはしないかと心配している。

レーニンが指導した偉大な十月革命から現在までの無数の革命戦争の経験は、いずれもつぎのような真理を証明している。はじめは素手であった革命的人民が、最後には牙まで武装した支配階級にうち勝った。武器の劣ったものが武器のまさったものにうち勝った。原始的な刀、ほこ、小銃、手投げ弾しかもたなかった人民の軍隊が、最後には現代的な飛行機、戦車、大砲、原子爆弾をもった帝国主義の軍隊にうち勝った。遊撃隊が最後には正規軍にうち勝った。軍事学校の門をくぐったことのない「いなか者」が最後には士官学校を卒業した「ハイカラ」にうち勝った、などがそれである。事態はどうしても修正主義者の論法どおりには発展せず、どうしても修正主義者に平手打ちを食わせるのである。

フルシチョフ修正主義者は、核兵器をもたない国はたとえどんな作戦方法をとろうと、核兵器をもった敵にうち勝つことはできない、といいはっている。これは、核兵器をもたないものは、だれでもひどい目にあうのがあたりまえであり、侮辱されるのも、絶滅されるのもあたりまえであって、敵の核兵器のまえに降伏するか、でなければ他の核大国の「保護」にすがってそのいいなりになるほかない、というに等しい。これは典型的な弱肉強食主義ではないだろうか。これは帝国主義が核恐かつをやるのに力を貸しているのではないだろうか。これはまた、他の人びとが革命をおこなうのを公然と許さないことではないだろうか。

フルシチョフ修正主義者は、核兵器、ロケット部隊がすべてを決定するのであって、通常兵器の部隊はものの数でなく、民兵はひと山の肉塊にすぎない、といいはっている。かれらはこのようなデタラメな論法で、社会主義国が人民大衆を動員し、人民大衆に依拠して、人民戦争で帝国主義の侵略に対抗しようとしているのに反対している。かれらは国家の運命をすっかり核兵器のうえに賭けて、アメリ帝国主義と核賭博をやり、政治的取引をおこなっている。かれらの軍事的戦略思想は核兵器至上論である。かれらの建軍路線は物だけをみて人間を見ず、技術だけを求めて政治を無視するブルジョアジーの建軍路線である。

フルシチョフ修正主義者は、地球上のどんなに小さな火花でも世界核戦争をひきおこしかねな

いし、人類を絶滅させかねない、といいはっている。かれらのこうした論法でいくと、われわれの地球はとっくの昔になん回絶滅したかわからない、ということになる。しかし、戦後の二十年間に、民族解放戦争はつぎつぎとたえまなくおこっているが、いったい、そのうちのどれが世界大戦にまで発展したのであろうか。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放戦争は、世界戦争をおこそうとするアメリカ帝国主義の計画を混乱させてきたのではないだろうか。これとは反対に、あらゆる手をつかって人民戦争の「小さな火花」をもみ消そうとしている連中こそ、アメリカ帝国主義の侵略と戦争の気炎に油をそそいでいるのである。

フルシチョフ修正主義者は、かれらの「平和共存、平和移行、平和競争」の総路線を実行しさえすれば、被抑圧者は解放をかちとることができ、「武器もなく、軍隊もなく、戦争もない世界」を実現することができるのだ、といいはっている。ところが、非情な現実は、アメリカをかしらとする帝国主義と反動派が戦争機構の強化に狂奔しており、毎日のように革命的人民に血なまぐさい弾圧を加え、毎日のようにすでに独立した国ぐにを武力で侵犯し、おびやかしているのである。フルシチョフ修正主義のこうした一連のやり方は、すでにいくつかの国でおお勢の人に命を落とさせている。こうした悲惨な血の教訓が、これでもまだ足りないとでもいうのだろうか。フルシチョフ修正主義の総路線の実質は、ほかでもなく、被抑圧人民と被抑圧民族に武器を

すてさせ、すでに独立した国ぐにに武器をすてさせ、完全武装したアメリカ帝国主義とその手先に殺されるような目にあってもだまっているよう要求するものである。

帝国主義や反動派は、「役人が放火するのは許すが、民衆が灯をとぼすのを許さない」ものである。フルシチョフ修正主義者は帝国主義のこうした哲学をうけいれて、世界平和を守る最前線に立っている中国人民に、「きみたちは好戦的である」といっている。紳士諸君、きみたちのこうした悪口こそ、われわれにとっては光栄なのである。われわれのこうした「好戦」こそ、帝国主義が世界戦争をひきおこすのを阻止するのに役立っているのである。人民のこうした「好戦」は自分を守るためのものであり、帝国主義者と反動派にせまられてそうしたものであり、またかれらに教えられたものでもある。われわれは革命的な「好戦」で反革命の好戦に対抗しているにすぎない。帝国主義とその手先がいたるところで人を殺しているのは大目にみ、人民が自衛のために反撃にでたり、互いに支援しあったりするのは許さないとでもいうのだろうか。世界中のどこにそんな理屈があるのだろうか。フルシチョフ修正主義者はケネディやジョンソンなどの帝国主義者を「理性派」とよび、われわれや、帝国主義の侵略に直面して敢然と武力で自衛をおこなっているすべての人民を「好戦派」だと称している。これこそフルシチョフ修正主義者が強盗帝国主義の共犯者であることを完全に暴露している。

戦争が人民に破壊、犠牲、苦痛をもたらすのは、われわれもよく知っている。だが、もし帝国主義の武力侵略に抵抗せず、甘んじて亡国奴になるならば、その結果うける破壊、犠牲、苦痛は、はるかに大きなものとなるであろう。革命戦争においては、少数の人びとの犠牲によって、全民族、全国家ひいては全人類の安全がもたらされ、一時的な苦痛によって、長期の、ひいては恒久の平和と幸福がもたらされるのである。戦争は人民を鍛えあげ、歴史を前進させる。この意味からいえば、戦争は偉大な学校である。

レーニンは第一次世界大戦にふれて、こういっている。「戦争は、もっとも文明的な、もっとも文化の発達した国を飢餓の状態におとしいれる。だが、別の面からみると、大きな歴史の過程としての戦争は社会の発展をかつてないほどはやめる」㉑。「戦争は大衆をめざめさせ、空前の惨禍と苦難によってかれらを奮起させる。戦争は歴史を前進させる。こうして、歴史はいま、機関車のような速度でとぶように前進しているのである」㉒と。フルシチョフ修正主義者の論法でゆけば、レーニンは最大の「好戦分子」だということになるではないか。

フルシチョフ修正主義者の観点とはまったく反対に、マルクス・レーニン主義者と革命的人民は、これまでに感傷的な観点で戦争を見たことはなかった。帝国主義のひきおこす侵略戦争にたいするわれわれの態度は従来からひじょうにはっきりしており、第一に反対し、第二に恐れない

ということである。だれが攻撃を加えてきても、われわれはそれを掃滅してしまう。被抑圧民族と被抑圧人民のおこなう革命戦争にたいしては、われわれはこれに反対しないばかりか、一貫してだんこ支持し、積極的に援助してきた。これまでもそうであったし、いまもそうであり、そしてこれからも、われわれの力が発展するにつれてこうした支持と援助はますます強められてゆくであろう。革命の勝利、建設の発展、国の富の増大、生活の改善によって、われわれもまた革命的闘志を失い、世界革命の事業を放棄し、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を投げすてるだろう、と思っている者がいるとしたら、それはまったくの白昼夢である。いうまでもなく、どんな革命も自国人民の要求によっておこなわれるものである。自国人民がめざめ、立ちあがり、組織され、武装してこそ、はじめて戦闘を通じて、帝国主義とその手先の反動的支配をうち倒すことができるのであって、どんな外国人もかわってそれをやることもできなければ、それを請けおうこともできない。この意味からいえば、革命は輸入できないものである。だが、それはけっして、世界各国の革命的人民が帝国主義とその手先に反対する闘争のなかで、互いに共感し、支援しあうことを排除するものではない。各国人民にたいするわれわれの支援は、まさにこれら諸国人民が自力更生でたたかいをすすめるのに役だっているのである。

フルシチョフ修正主義者がおこなっている人民戦争に反対する宣伝、敗北主義の宣伝、降伏主

義の宣伝は、全世界の革命的人民のあいだで、士気をにぶらせ、精神的に武装解除をさせる役割をはたしている。かれらは、アメリカ帝国主義が自分でやれないことをやって、アメリカ帝国主義を大いに助けている。かれらは、アメリカ帝国主義の戦争冒険をさかんにはげましている。フルシチョフ修正主義者はマルクス・レーニン主義の戦争にかんする革命的学説にまったくそむき、人民戦争の裏切者となっている。

全世界のマルクス・レーニン主義者と革命的人民は、アメリカ帝国主義に反対するたたかいを勝利のうちにおしすすめ、人民戦争を勝利のうちにおこなうため、だんことしてフルシチョフ修正主義に反対しなければならない。

現在、世界の革命的人民のあいだでは、フルシチョフ修正主義の市場はますます狭くなっている。帝国主義とその手先の武力侵略と武力弾圧がおこなわれているところでは、どこでも、侵略に反抗し、抑圧に反抗する人民戦争がおこなわれている。人民戦争はかならずすさまじい勢いで発展する。これは客観的法則であり、アメリカ帝国主義の意志によって変えられるものでもなければ、フルシチョフ修正主義者の意志によって変えられるものでもない。世界の革命的人民は、その前進の途上ですべてを一掃することができる。フルシチョフはすでにだめになったし、フルシチョフ修正主義の後継者にも良い末路はありえない。人民戦争に反対する帝国主義、各国反動

派、フルシチョフ修正主義者はすべて、革命的人民の鉄のほうきによって歴史の舞台からきれいさっぱり掃き出されるであろう。

×　×　×

抗日戦争が勝利してから二十年のあいだに、中国は大きく変わり、世界は大きく変わった。そして、世界の革命的人民にはいっそう有利に、帝国主義とその手先にはいっそう不利になった。

日本帝国主義が中国侵略戦争をひきおこした時、中国人民は、ほんの小さな人民の軍隊と革命根拠地をもっていただけで、東方の軍事覇王にたちむかったのであった。まさにそのような時に、毛沢東同志は、中国の人民戦争は勝利することができ、日本帝国主義は打倒することができるとのべたのである。こんにち、世界人民の革命根拠地はこれまでになく拡大強化され、世界人民の革命運動はこれまでになく高まり、帝国主義はこれまでになく衰え、帝国主義の頭目アメリカ帝国主義はつづけざまに敗北をくっている。われわれは、各国の人民戦争は勝利することができ、アメリカ帝国主義は打倒することができる、といっそう自信をもって言うことができる。

世界の人民には十月革命の経験があり、反ファシズム戦争の経験があり、中国人民の抗日戦争と解放戦争の経験があり、朝鮮人民の抗米戦争の経験があり、ベトナム人民の解放戦争と抗米戦

争の経験があり、またその他多くの国ぐにの人民の革命的武装闘争の経験がある。これらの経験をよく研究し、さらにこれを自国の革命の具体的実践と創造的に結びつけさえすれば、各国の革命的人民はそれぞれ自国の人民戦争の舞台で、いっそう堂々とした壮麗な歴史劇を演じ、最後には各国人民の共同の敵アメリカ帝国主義とその手先をすべて葬り去ってしまうことができるにちがいない。

ベトナム人民の抗米救国闘争は、全世界人民の反米闘争の当面の焦点である。中国人民がベトナム人民の抗米救国闘争を支援する決意は、確固としてゆるぎないものである。アメリカ帝国主義がどのように戦争冒険を拡大しようと、アメリカ侵略者をひとり残らずベトナムから追いだすまで、中国人民は全力をかたむけて、ベトナム人民を支持するであろう。

いまアメリカ帝国主義者は、もう一度中国人民と渡りあい、もう一度アジア大陸で大規模な地上戦をやるとわめきたてている。もし、かれらがどうしても、日本ファシストのかつて歩んだ道を歩もうとするなら、それもよかろう。好きなようにするがよい。中国人民は、中国人民なりにアメリカ帝国主義の侵略戦争に対処する方法をもっている。われわれの方法はけっして秘密でもなんでもない。もっとも重要なのは、やはり、人民を動員し、人民に依拠し、全民皆兵を実行し、人民戦争をおこなうという、このことである。

われわれはもういちど、アメリカ帝国主義者に告げておく。武器をとった数億の中国人民が形づくる大海原は、きみたちの数百万の侵略軍を十分にのみこむことができる。きみたちがあえてわれわれに戦争をおしつけるなら、きみたちはわれわれに行動の自由をあたえたことになる。その時には、戦争がどのように戦われるか、それはもはやきみたちの思い通りにはならない。このようにして敵をせん滅するのが有利であるとすれば、われわれはそのような戦法をとり、どこそこで敵をせん滅しやすいということになれば、われわれはそこで戦う。二十年前に日本侵略者をうち負かすことができた以上、こんにち中国人民は、アメリカ侵略者を死地に追いこむ確信をいっそう強くもっている。きみたちが海・空の優勢を見せびらかしても、中国人民をおどすことはできないし、きみたちが原子爆弾を振りまわしても、中国人民をおどすことはできない。きみたちが軍隊をくりだそうと考えているなら、そうしたがよかろう。くりだすからには、多ければ多いほどよい。やって来れば、やってきただけしまつをつけ、そのうえ領収書を書いてやってもよい。中国人民は偉大な気概をもった人民である。われわれはアメリカ帝国主義に反抗する重責を敢然とにない、この全世界人民のもっとも凶悪な敵を最終的にうちまかすたたかいのなかで、しかるべき貢献をするであろう。

ここで、きびしく指摘しておかなければならないのは、抗日戦争が勝利したとき、台湾はすでに中国に返還されている、ということである。アメリカ帝国主義が台湾を不法占領するのは、まったく道理のないものである。台湾省は、中国の領土の切り離すことのできない一部分である。アメリカ帝国主義は、かならず台湾から出ていかなければならない。中国人民はかならず台湾を解放する。

抗日戦争勝利二十周年を記念するにあたって、われわれはまたつぎのように、おごそかに指摘しておかなければならない。アメリカ帝国主義に育成されている日本軍国主義者が、もし日本人民とアジア人民のだんことした反対を無視し、どうしてももう一度昔の夢を見るためにアジア侵略のふるい道を進もうとするなら、かならず前よりさらにきびしい懲罰をうけるであろう。

アメリカ帝国主義は、いま世界戦争をひきおこす準備をすすめている。だが、それはアメリカ帝国主義の命を救うことができるだろうか。第一次世界大戦ののち社会主義のソ連が生まれた。第二次世界大戦ののちには、一連の社会主義国と多くの民族独立国が生まれた。もしアメリカ帝国主義がどうしても第三次世界大戦をひきおこすなら、その結果かならずさらになん億という人びとが社会主義の側に移り、帝国主義に残された地盤はわずかになり、帝国主義制度全体が完全に崩壊することもありうる、ということを断言することができる。

世界の前途について、われわれは楽観している。われわれは、人類の歴史における戦争の時代

は人民の手によって終止符がうたれる、と確信している。毛沢東同志はすでに早くからつぎのように指摘している。戦争というこの怪物は、「人類社会の発展によって終局的には消滅されるし、しかも遠くない将来に消滅されるであろう。だが、それを消滅する方法はただひとつしかない。つまり戦争をもって戦争に反対し、革命戦争をもって反革命の戦争に反対することである」㉓

アメリカ帝国主義の侵略、抑圧、略奪をうけているすべての人民は、団結し、人民戦争の正義の旗を高くかかげ、世界平和、民族解放、人民民主主義、社会主義の事業のためにたたかおう。勝利はかならず全世界人民のものである。

人民戦争の勝利万歳！

注

① 西安事変――国民党東北軍の将軍張学良と第十七路軍の将軍楊虎城は、中国労農赤軍と人民抗日運動の影響をうけて、中国共産党の提起した抗日民族統一戦線の主張に賛成し、蔣介石に内戦の停止、連共抗日を要求したが、蔣介石はかれらの要求を拒否した。一九三六年十二月十二日、張、楊は西安で蔣介石を監禁した。事変発生後、中国共産党は民族の利益から出発して、調停をおこなったため、蔣介石はよぎなく連共抗日の条件をうけ入れた。

② 「何百万何千万の大衆を抗日民族統一戦線に参加させるためにたたかおう」、『毛沢東選集』第一巻

③ 三・三制政権というのは、抗日民族統一戦線の原則にもとづき、政権組織のなかで、共産党が三分の一、非党員の進歩分子が三分の一、中間派が三分の一をそれぞれ占めること。

④ 「現在の抗日統一戦線における戦術の問題」、『毛沢東選集』第二巻

⑤ 「中国革命と中国共産党」、『毛沢東選集』第二巻

⑥ 「連合政府について」、『毛沢東選集』第三巻

⑦ エンゲルス「一八五二年フランスにたいする神聖同盟の戦争の諸条件と見通し」『マルクス・エンゲルス全集』第七巻

⑧ 「持久戦について」、『毛沢東選集』第二巻

⑨ スズメ戦とは、中国共産党の指導下にある敵後方の抗日遊撃隊と民兵があみだした一種の大衆的戦法。スズメ戦と名づけたのは、一つはスズメが空いっぱいに飛び回り、いたるところで見られるその広範な有様を形容し、一つは三人五人と組んで、神出鬼没の行動で敵を殺傷、消耗、疲労させるその機動性を形容したもの。

⑩ 「中国革命戦争の戦略問題」、『毛沢東選集』第一巻

⑪ 「当面の情勢とわれわれの任務」、『毛沢東選集』第四巻

⑫ 「中央社、掃蕩報、新民報の三記者との談話」、『毛沢東選集』第二巻

⑬「経済活動を学ばなければならぬ」、『毛沢東選集』第三巻
⑭マルクス『資本論』第一巻
⑮「戦争と戦略問題」、『毛沢東選集』第二巻
⑯「戦争と戦略問題」、『毛沢東選集』第二巻
⑰「革命軍隊と革命政府」、『レーニン全集』第八巻
⑱「抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針」、『毛沢東選集』第四巻
⑲「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話」、『毛沢東選集』第四巻
⑳毛沢東主席の一九六四年十一月二十八日の「アメリカの侵略に反対するコンゴ（レ）人民を支持する声明」、『全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者とそのすべての手先を打ち破ろう』人民出版社一九六四年版
㉑「パンと平和のために」、『レーニン全集』第二十六巻
㉒「今日の主要な任務」、『レーニン全集』第二十七巻
㉓「中国革命戦争の戦略問題」、『毛沢東選集』第一巻

1980 10. 11

人民戦争の勝利万歳

1965年　初版発行　　定価 40 円

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）
発行者　中国国際書店
（北京 P.O.Box 399）

編号：（日）2050—1321　　3—J—707P
00039

★ 既刊図書案内 ★

毛沢東著作

毛沢東同志は論じている——
帝国主義といっさいの反動派はハリコの虎である　25

時事問題

ベトナム人民を支援し
アメリカ侵略者をうちやぶろう（第一—四集）　40
ベトナム人民はかならず勝利する
アメリカ侵略者はかならず敗北する（写真集）
第一集　40
第二集　50
三千万ベトナム人民のおごそかな誓い　40
アメリカの武力侵略に反対する
ドミニカ人民を支持する　40
全世界の人民は団結して核兵器を
全面的に、徹底的に、あますところなく、
だんことして、禁止し、廃棄しよう
核独占を打破し核兵器を消滅しよう　150　30

理論著作

国際共産主義運動の総路線についての論戦　340
☆国際共産主義運動の総路線についての提案
☆ソ連共産党指導部と
われわれとの意見の相違の由来と発展
☆スターリン問題について
☆ユーゴスラビアは社会主義国か
☆新植民地主義の弁護人
☆戦争と平和の問題での二つの路線
☆根本的に対立している二つの平和共存政策
☆ソ連共産党指導部は
現代最大の分裂主義者である
☆プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義
☆フルシチョフの
エセ共産主義とその世界史的教訓
☆フルシチョフはなぜ退陣したか

付録

ソ連共産党中央委員会が
中国共産党中央委員会にあてた書簡

出版者	北京	外文出版社	発行者	中国国際書店

ソ連共産党中央委員会が
ソ連各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡
——
フルシチョフ修正主義に反対する
たたかいを最後までおしすすめよう
（『国際共産主義運動の総路線についての提案』発表二周年を記念して）　40
レーニン主義の偉大な勝利
（レーニン生誕九十五周年を記念して）　40
レーニン主義万歳　上製　110
並製　90
プロレタリアート独裁の歴史的経験、　上製　60
反ファシスト戦争の歴史的経験『人民日報』編集部　並製　40　40
ドイツ・ファシストにたいする勝利を
記念しアメリカ帝国主義に反対する
たたかいを最後まですすめよう　羅瑞卿　40
哲学・社会科学工作者の戦闘的任務　周揚　50
インドネシアの
アリアルハム社会科学学院での演説　彭真　40　50
中華人民共和国第三期全国人民代表大会
第一回会議主要文献

中国の社会主義的工業化と農業集団化　薄一波　鄧魯言　40
前進する人民公社　陶鑄　30
わが国青年の革命化のためにたたかおう　胡耀邦　40
文化戦線における大革命　彭真　柯慶施　陸定一　80
革命の後継者の養成は党の戦略的任務である
安子文その他　50
中国革命における農民問題　林一舟　肖述　50
政治工作はすべての工作の生命線である
『紅旗』誌評論員　50
中国国民経済の社会主義的改造
薛暮橋　蘇星　林子力　200

兄弟諸党の重要論文

セイロン共産党中央委員十名の声明　30
マルクス・レーニン主義の革命的旗を
さらに高くかかげよう　朝鮮『労働新聞』社説　30
オーストラリアの
マルクス・レーニン主義者の宣言　20
マルクス・レーニン主義者は団結せよ
（ベルギー共産党ブリュッセル州委員会の決議）　40

出版者	北京	外文出版社	発行者	中国国際書店

ベトナム南部で誰が勝利するか　グエン・チタン　10
中国共産党広東省委員会党学校での講演　V・G・ウィルコックス　30
フルシチョフに答える（ブラジル共産党中央委員会の決議）　30
マラヤと関係のあるいくつかの国際問題　『マライヤン・モニター』誌　20
マラヤ人民の経歴は　修正主義の謬論を反駁している（マラヤ人民の武装闘争十六周年を記念して）　『マライヤン・モニター』誌　20
自力更生と自立的民族経済の建設　朝鮮『労働新聞』論説　15
朝鮮労働党第四期中央委員会　第五回総会の公報　10
分裂をもたらす各国党会議は阻止しなければならない　朝鮮『労働新聞』社説　10
現代修正主義者の「理論」と実践　ジャック・グリッパ　30
弁証法的唯物論と史的唯物論の武器で　インドネシア革命の勝利をかちとろう　ニョト　20

革命回顧録、文学、写真集、その他

辛亥革命　呉玉章　160
中国赤軍物語（革命回顧録）　楊尚奮　300
革命遊撃根拠地物語（革命回顧録）　陳昌奉　120
長征の頃の毛主席（革命回顧録）　徐景賢　130
黄浦江のあらし（革命回顧録）　呂興臣　130
ネオンの下の哨兵（脚本）　沈西蒙　漠雁　180
赤い女工さん（中国ルポルタージュ集）　巴金その他　150
新しい人間像（短篇小説）　胡万春　上製　120　並製
妖怪へんげを恐れぬ話　馬良の神筆（民話集）　120
中国の登山運動（写真集）　270
新しい北京（写真集）　400
中国写真選集　400
600

★近刊預告★

たたかいの行程　周立波　肖木
わたしと祖国　侃志福　李鳳恩その他

出版者　北京　外交出版社　発行者　中国国際書店